

---

# 彼とあたしとワイシャツと。

あずまひとみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼とあたしとワイシャツと。

### 【Nコード】

N5773F

### 【作者名】

あずまひとみ

### 【あらすじ】

いつもの通学路、いつもの通学風景。風景の一部だったはずのその人に、ある日あたしは水をかけられた。…これから学校なのに！どうしてくれるのさ、もう！

いち。出会いは水も滴るイイ女？

少し気付いてくれるだけでよかった。

じっと眺めているだけのこの生活に

知らずに飽きていたのかもしれない。

八月。濃い緑色の葉がつよい日ざしに照らされてきらきらと輝いている。

2

プールに向かう親子連れも多く、公道はにぎわっていた。

いいな。楽しそう。

あたしはその中を、「スイマセン、スイマセン」といいながらすりぬけていく。

毎日のように通る車屋さんの前。

お！今日もやってるやってる。

若い男の人が、水まきを。  
バシャッ。

「え」

ところがどうしたものか、その人が水を巻く瞬間と、あたしが前を横切る瞬間のタイミングが、ばっちりあってしまった。

「うそ…これから学校行かなきゃいけないのに…」

制服はびしょびしょで、すでに学校に行けるレベルじゃない。

ああ…。

この気持ちをどう表そうか…！

憤慨するあたしに、

「すみません…大丈夫？」

水をかけた本人であるその人が、そばに来てそう言った。二十歳前後の、わりと整った顔をしている男の人だった。

思わず一瞬、どきりとする。

「うちの店で乾かしてったらいいよ」

染めていない若干長めの綺麗な黒髪をかたむかせて、彼は言った。

「じゃあ…お言葉に甘えて」

このままじゃどこにも行けないし…。そうしよっかな。

あたしは案内されるがままに後についてった。

店内に入ってみると、そこは思ったよりも綺麗な場所で。

並べられたショーウィンドウの車。やわらかいライトアップ。

へえ…車屋さんで、こんななんだ。

そう、ちょっとばかりイメージを改めたんだ。

「じつち」

誘導されるがまま、従業員用の通路を歩く。

道中      彼は1度も、こちらを見ない。

会ったばかりの人なのだから、当たり前といわれれば当たり前。

でもどうしてか      あたしは、そのことに寂しさを感じてる。

自分でもこの感情を何というのか、名前など付けられないまま  
気がついたときには、従業員用の更衣室に通されていた。

「着替え、ここに置いとくね。…僕のワイシャツだから少し大きい  
と思うけど」

そう言って差し出されたのは、2Lのシャツ。

細身の割に大きいサイズに、妙にときめきを感じた。

これに着替えればいいわけね。

「何から何まで…ありがとうございます」

「ううん、僕のせいだから。それより」

早く着替えて。

最後に、そう呟いたのは、気のせいだっただろうか？

気まずそうに目線をずらして言った後、彼は部屋を出ていった。

…え？なにになに？？

最後のなに？目も合わせないで。

着替えようとブラウスのボタンに手をかける。

…これか！…！！…！！

あの人が目逸らしてた理由、分かっちゃった。

…水で下着が透けてたんだね。

「でも、年上なのに…」

やば、可愛い。

自然に笑い声がこぼれてしまった。

つてえ！そんなことより着替え着替え！！

と、そのとき。

ドンッ。

「はっ！？」

なななななに！？

怪奇現象！？ポルターガイスト！？

今、入り口のドアひとりでに鳴ったよねえ？

ビビるあたしをよそに、それ以降、一度もドアは鳴らなかった。

なんだったのだろう。

「あ、あの…終わりました」

着替えおわって、ドアを開けて後向きで待ってた男の人に、恐る恐る声をかける。

「ああ…お疲れさま」

だけど、そう言う彼のほうがあたしには疲れて見えていた。

なんか、呼吸乱れてるし。気のせいですかね？

「サイズ大丈夫だった？」

「はっ？えっ、ええなんとか！」

…いきなり話しかけるから、変な声が出てしまった。  
「髪…まだ少し濡れてるね」

一人ごとのように呟いて彼はあたしの髪に触れる。

くくくくくくッ！！！！！！！

近い近い近いって！！！！

けど、苦節十六年。

男慣れしてないあたしはなんにもできずに固まった。

…我ながら純情だと思う。

彼は、まだ触ってる。

…黙れあたしの心臓。

ひとつ分うえにある（そして今はかなり近い！！）彼の顔を、  
そっと見つめてみた。

…綺麗。本当に、男の人？

格好いいわけじゃない。

可愛いわけでもない。

ただ　　綺麗。



この言葉に尽きる。

なんていうか…パーツの一つ一つが整ってんのよね。

……。

「ドライヤー」

…はっ？

「ドライヤー、要る？」

ええ？

「髪…」

ああ…髪ね！

危ない危ない…見とれてた。

「いつ…いーですッ！大丈夫ですから！」

「えっ、でも自然乾燥は髪に悪」

「ホントに！大丈夫ですから！！」

てゆーかこれ以上あなたと居たらあたしの心臓が大丈夫じゃなくなりますからッ！！

「…いいの？本当に？」

「はいあたし自然乾燥大好きなんでっ」

…意味分らない！

「そうなの？じゃあ良いかな」

納得しちゃうの！？

「出口まで送るよ」

…天然ですかね？

こうしてあたしのつらくも甘ずっぱい時間は、終わりを告げたのだった…。

「じゃあ…本当にごめんね。気をつけて」

「はい…」

あーあ…行かなきゃいけないのか…。

何というか…

離れがたい。

道路に面した場所で別れの言葉を口にする。

「あっあのー！」

けどあたし、このままじゃ終われないー！

「連絡先…教えてもらって良いですか!？」

「え」

ほらー!!訝しんでる!!

「その…ワイシャツ、返さないといけないし」

とっさに出たのはこんな理由。

…別に变じゃないよね?返さないといけないのは嘘じゃないし。

「シャツなんて…別にもらってくれても」

もらっ……!?

…それもそれでおいしいかも。

じゃなくて!!

「だめですそんなの!!お借りしたものはきちんと返さないと!」

シン…と一瞬の沈黙。

「…ふっ」

え？

「はははっ」

「…何ですか？」

「君、見た目に似合わず結構律儀な性格なんだね。びっくりした」

それだけ言うと、彼はまた笑いだす。

彼の綺麗な黒髪がさらさら揺れる。

「見た目に似合わずって…失礼な」

ぼそつと呟いたあたしだって、ホントは。

彼が笑顔を見せてくれたことが、嬉しくて仕方なかった。

「じゃあ…はい」

まだ呼吸が多少荒いが、アドレスと番号、それから名前が書かれた紙を彼はくれた。

「くじょう…とうま」

九条透真。

このひとの名前…。

「そう。君は？」

「あたしですか？…さくら、みうつていいいます。漢字は、こつです」  
手のひらに指で字を書いてみせた。

“ 櫻 未羽 ”

「…みうつ？可愛い名前だね」

目線を合わせて九条さんはまたふわりと笑った。

駄目だあたし、この笑顔に弱い。

「…あ…りがとございます…」

所々小さく、蚊の鳴くような声で言ったから、彼に聞こえたかどうかは分からない。

「じゃあ、あの…学校行かないといけないので」

「そっか、そうだね。いつてらっしゃい」

「…っ。いつてきます」

な、何ですかね、この夫婦みたいな会話。

ギクシャクとした笑顔で、あたしはその場を去った。

「っ、はあああああああゝ」

だから、その後に九条さんが大きなため息をついたことなんて、あたしは知らない。

学校に着くと、案の定友達から追及をうけた。

「未羽うゝ？こんな時間まで、どこで何してたのかなあゝ？今何時間目かご存知ですかゝ？」

うっ…この、情報収集屋め。

「二時間め…」

「吐ーけ」

につこりと語尾にハートがつく勢いで、どす黒い笑顔を見せるあたしの友人、黒瀬ひな。

「…黙秘！」

ひなに知られたらこれから先どうおちよくられるか、分かったもんじゃない。

あたしは精一杯の抵抗を試みせた。

「うふッ。いつから未羽そんなに偉くなったの？未羽に拒否権なんてないぞっ」

可愛い顔してコイツは！

…まったく末恐ろしい。

「別に、なんもないよ。途中で腹痛くなっただけ」

平静を装う。

「ほんと？」

「ほんと」

「じゃあ聞くけどね、どおしてシャツが学校指定のじゃないのかなあ？」

「……っ！」

それは気づかなかった。くそっ、盲点。

「さ、どーして？」

答えられるもんなら答えてみなさい。

…目が、語っていた。

く…、あたしの抵抗もここまでか！？

なんて、諦めかけた時。

「はぁーい。HR始めるよ」

入って来たのは担任の小川原聖子。通称聖子ちゃん。

「ちっ…。聖子ちゃんなんてバッドタイミング。これこそKYだわ」

ああ！聖子ちゃんなんてグッドタイミング！あなたこそ神だわ！！

…同じ時あたしはそんなことを思ったりしていた。

「しょうがないなあ。今はとりあえずやめとくけど。次の休み時間、覚悟しててねッ」

形の良い、小さな唇を怪しげな三日月形に変えて、スカートのプリーツを鮮やかに翻しながら、ひなは自分の席に戻っていった。

…あたしはというと、どっと疲れが押し寄せて思わずため息。

頬杖なんかついて、聖子ちゃんの連絡事項を話し半分に聞いていた。

机のうえに、腕で顔を隠すように突っ伏す。

学生ならみんな寝るときこうするよなあ、とかどうでもいいこと考えたりして、あたしは目を閉じた。

ときおりふいに、ふわっといういい香りがする。

「…??？」

何コレ？いつものあたしの香りじゃない。

ああ。



このシャツの。…九条さんの、香りだ。

そう思ったら、一気にむず痒いような、ふわふわと体が浮くような、不思議な気持ちになった。

シャツ、返したくないな…。

そう思う自分はちょっと変態くさいな、と思ったけど本心なのだから仕方がない。

あたしはもう一度だけ深く息を吸って、意識を手放した。

…次に目を開けるきっかけになったのは、ひなの声。

「みーうー。起きてよお、聞きたいこといっぱいあるんだからねっ」

「う…ひな」

「なあに、その寝ぼけ眼。ねえ、結局そのシャツ誰のなのよっ」

ひながあたしの腕を握って体をゆさゆさと揺らす。

やめてくれ。寝起きで頭が痛い。

「なーんーでもーなーいーってーばー」

「もう、バレバレなんだから教えなさいよお。…拒否権ないって、言っただよねっ」

可愛らしく言うてはいるけど、ひな、目が笑っていない。

あたしは背筋に寒いものを感じ、観念して話すことにする。

あーあ…これから先、このネタでいじられるんだろーなあ。

「今日学校来るとちゅうに打ち水かけられたのよ、車屋さんの若い男のひとに」

「若い男のひとお？未羽、いいなあ。カッコよかった？」

って、食い付くのそこかい。

あたしは心中で突っ込みながらも、ひなの問いに九条さんの顔を思い浮かべる。

「カッコいいっていうより、綺麗、だったな」

口に出してみると改めて実家させられて、自らもウンウン、と頷きながら会話をする。

「綺麗なの？…うーん、よく分かんない。どんな顔」

「どんなって…こっ…」

あたしはどうか伝わらないかと、両手が意味不明な動きをする。

「なあにそれー意味分かんないよっ」

「うーん、髪は黒くてさらっさらで…」

「うんうん」

「鼻筋通ってて…」

「それで？」

「肌がきめ細かい」

「……………」

「あと、目がおっきいかな」

「…男？」

「男」

自信を持ってきっぱりと言う。

「…ねえ、きよおの帰り連れてってよ」

「ええ？車屋さんに？」

何を言っかなこの子は！！

「見たいもおーんっ。ね、約束ー」

ひなはあたしの手を取って上下にブンブン振ると、満足そうに笑って自分の席に戻っていった。

今ので約束したことになっているらしい。

呆然としながらもあたしは、もしかしたらまた九条さんに会えるかも、なんて不謹慎なことを考えて知らずに胸を高鳴らせていた。

放課後、もう一回化粧直ししなきゃ、なんて考えながら。

九条さん、現金な女でごめんなさい！

いち。出会いは水も滴るイイ女？（後書き）

「時計塔の下で」の連載を終了してから、ずいぶんと時間が経ってしまいました（汗）今度は、何の裏も伏線もない素直な恋愛を書きたいと思い、始めました。それほど長くならない予定です（・・・）  
ぜひ一読を 更新は週一、土曜日の予定でござりまする。ご意見  
ご感想、待ってます（・・・・）

## に。日々を彩る五時の約束

軽くメイクを直してから二人で学校を出て、あたし達はすっかり車屋さんに来ていた。

「どれ？どのひと？」

ひなが148センチの低身長をカバーするように、精一杯首を伸ばして事務所の中を覗く。

あたしは163センチとわりと大きいので、普通に立っていても中の状態は伺えていた。

ここの車屋さんは、外からでも事務所の中が見える造りなのだ。

「うーん…いないみたい」

「ええー、つまんないのお。せつかく美男子を拝めるかと思ったのに」

ひなが唇を尖らす。

「はは…仕方ないよ。今日は帰る？」

あたしは九条さんがいないことにほっとしながらも、心のどこかで少し残念な気持ちがあった。

不思議だよなあ。…今朝会ったばかりのひとなのに。

ふう、とため息を吐いて踵を返したその瞬間。

「きゃあ！」

「うわ、びっくりした。…未羽ちゃん」

すぐ後ろに、思い描いていた彼がいた。

「くくく九条さん！なんでそんなところにいるんですかつ」

「ははっ、くが多いよ。外回り行って今帰ってきた所なんだ。見覚えある後ろ姿が不審に会社の中覗いてるなあと思ったら、やっぱり未羽ちゃんだっただね」

「う、その…はい」

不、不審だつてさ…めちゃくちゃ恥ずかしい。

「見覚えある」って言うてくれたことは、すごく嬉しいけど。

「今朝はほんとうにごめんね。学校、大丈夫だった？」

「あ、はい！それは全然問題なしです」

「あー、良かった。僕今日仕事してても、未羽ちゃんは大丈夫かなっていうことしか頭に浮かんでなくて。安心したよ」

「九条さん…」

「それでどうしたの？」

はっ！そうだった！あたし理由考えてない！！

何て言えーの？

ミ―ハ―心に負けて顔を見に来ました、って！？

あたしがうまく立ち回れず赤くなったり青くなったりしていると、おとなしくずっと横でいきさつを見守っていたひなが、元気に声を上げた。

「はいはーい。突然来てごめんなさい。あなたが九条さんなんですね。あたし、未羽の大ツツツ親友の黒瀬ひなって言います」

「へえー、そうなんだ」

え…、ひな？てゆうか、九条さんもそんなあつまり信用しないでよ！？

「はい。それでねえ、未羽から今朝のこと聞いたものだから、あたしも親友としてシヤツ貸してくれたお礼言いたって言って、無理矢理ここに案内してもらったんです」

得意満面。

ひなは堂々とそう言い切った。

「なるほどね。でも今朝はほんとに僕が悪かったから。お礼なんてよかったのに、未羽ちゃんいい友達持ったね」



「ははは」

あたしは乾いた笑いしか返せなかった。

ひな、恐るべし！

「じゃあ、今日のところは帰りまあす。九条さん、ばいばいっ」

え、ええ？ 帰んの？

あたしも慌てて頭を下げると、「さよーならっ」と言って車屋さんを後にした。

びつくりして小声で「うん、さよなら…」と返す九条さんが目の端に映って、あたしは何度も何度もごめんなさいと心の中で謝っていた。

そして、夜。九条さん宛のメールの編集画面を表示したまま、指が動かず数十分。

どうしよう…なんてメールしよう。

とりあえず連絡先ゲットしたのはいいけど、メールをしたら繋がりが切れてしまう気がして怖かった。

だって、『明日シャツ持っていくます』『分かった』ってなっちゃったら、それでもう用事は済んじやうじやない？

あたしはそんなの嫌だったから…。

でも、シャツを返すためだといって聞き出した以上、その内容でなければならぬ。

ため息をついて、あたしはメールを打ち始めた。

未羽です。

今日はいきなりすいませんでした。明日、学校終わったらシャツ返しに行きます

五分後、意外にも早く、メールの返事がきた。

携帯を握りしめてベッドにうつ伏せで寝ていたあたしは、思わずびくつと過剰反応してしまう。

…九条さんだよ。メール開けるの、意味もなく緊張するんですけど…！

分かった。未羽ちゃんは、何時頃くるの？

うわああああ。

九条さんの、初メール！！保護しなきゃ。

あたしは、ばかみたいにテンションが上がってしまうのを自覚した。やっぱりあたしって現金な女。

仕事は何時に終わるんですか？

学生で部活にも入っていないあたしの方が早く時間が空くのは目に

見えているから、九条さんの仕事が終わる時間に車屋さんを訪ねようと思ったのだ。

案の定、あがるのは五時過ぎだと返ってきて、あたしはその時間に合わせていくと伝えて、その日はメールを終わらせた。

だって、しつこい女だと思われなくなかった。

用もないのにメールを送る、うざい奴だと思われなくなかったから…。

九条さんとの出会い、初メール。

嬉しいような、悲しいような、微妙な気分で。

今日はやけに濃い一日だったと思いながら、あたしはいつのまにか眠りにについていた。

朝。チチチ…という鳥の鳴き声で目が覚める。

ああ、なんて清々しい朝の目覚め！

カーテンと窓を開けて、目一杯空気を吸い込む。

気持ちいいー。

ぐっ、と伸びをして、ふと枕元の時計に目をやったあたしは。

…どうかこれが、夢であってほしいと思った。

八時！？やばいって！間に合わないから！！

学校まで徒歩二十分で通っていたあたしは、めちゃくちゃ焦っていた。

ご飯も何もかも、後回し。

だからもちろん、ベッドサイドに用意していた洗濯済みの九条さんのワイシャツのことだって、頭からすっぽり抜け落ちていたのだ。

学校に着く、その時までには。

「未羽。どおしたの、ずいぶん疲れちゃってー」

…そりゃ、あんた。家からぶっ通しで走ってりゃあね？誰でも疲れ  
るっつーの。

「瀕死ー。こわ」

「……………」

「髪の毛もぐちゃぐちゃだねっ」

そうだよ。こんなんじゃ、九条さんにだって会えない……………。

九条さん…九条さん？

「あーッッ!!」

ワイシャツ!!ワイシャツ忘れてた!!

最悪…ありえない!今日行くって言っちゃったのに!

しかも、昨日携帯を握りしめて寝てしまったから充電もされていなかった携帯は、いまやただのインテリアと成り果てていた。

メールで教えようにも教えられない。第一、仕事なら見てもらえるかどうかさえ分かんないだし!

ああーもう、あたしの馬鹿!!どの面さげて九条さんに会いにいけっ  
つてゆーのよ!?

「未羽。心の中で会話しないで!。傍から見れば変人だよ」

ねっ、分かるう?と、ひなはあたしの頬をぺちぺち叩いた。

「痛い。分かる」

「あれ?自分変人って認めちゃった?うふふ」

……………。

「鐘。鳴るよ」

「ちえー、つまんない。未羽、今日も九条さんどこ行くんでしょっ  
?進展あつたら教えてねん」

だから、どこからそんな情報を！ほんとに怖い子！！

あんたどうせあたしが逐一報告しなくたって、その情報網使って状況把握しちゃうんでしょ！？

自分からはぜつつつしたい、教えねえ！！

なんて決意を固めたとき、ふと思った。

…五時まで何してよう？

結局。

時間になるまで、あたしはひなに付き合ってもらったのだった。

ふっ。…決まらない。

九条さんが勤めている車屋さん。そこから出たところすぐに、腰掛けられるような段差がある。

ひなと別れて学校から歩いて来て、疲れていたもんだからラッキー、なんて思ってた。

よし、ここをあたしの定位置にしよう。

…って、これからも来る気満々じゃん、あたし。

とりあえず明日こそはシャツ返すために来るのは確定なんだけどね？

九条さんだってそれ以外の用事なんかないの、分かってるんだけどね！

…ふと、冷静になった。

どーせ、変人ですから。男のひとのワイシャツの匂いかいで、鼻の下のばしちゃうってる変態ですから？

……………虚し。

なんてことを、つらつらと考えていた。

「未羽ちゃん？未ー羽ちゃん」

そして、これも変態が為せるリアルな妄想の一部なのだろうか。

目の前に九条さんがいる（ようにあたしには見えた）。

なめらかそうに見える白い肌の手を、ひらひらとあたしの顔の前で振っている。

「……………」

って！！本人だから！！本物だからあ！？

「はは、はいっ、はいっ！」

「はい、は一回」

「はい！」

「ぷっ…、くくっ」

「……………」

九条さんが吹き出した。

笑っちゃいけない。我慢しなければ。でももうだめだ、おかしすぎ。

…みたいな笑い方で。

「なんでございましょうか」

さすがのあたしもちよつとむっとして、半眼でじとつと睨めつける。

九条さんは、ごめんごめん、と謝った。だけどすぐに、でも、と言葉を続ける。

「可愛いんだもん」

「えっ…！？」

「犬みたいで」

…うん。分かってた、お約束。



「悪く受け取らないでね？ 誉め言葉だから」

「ええ！」

く、九条さんてやっぱり天然た。

紛うことなき天然だ！

そんなんでいまどきの女子が喜ぶとでも思ってたんだろうか？

「未羽ちゃんの笑顔、可愛いんだから」

…うん。

喜ぶ。

素直に喜んじゃうよ。

「…で、なんか見たところシャツ持ってきてないみたいだけど…」

「あー！」

そう、これが本来の用事。

「それなんですけど！ 今朝、寝坊して忘れてしまっ…ごめんなさい。携帯も充電切れちゃうし…」

「ああ、それでわざわざ伝えにきたんだねえ。ありがとう、僕は明日でも全然構わないから」

でた！必殺九条キラースマイル！！

うう…後光射してる。

「ありがとうございます」

「ん、いーよ。それに、また忘れても今度はメールで知らせてくれればそれでいいし」

ね？と言って、九条さんはまた笑う。

「え…」

一瞬、フリーズしたあたしを訝しげに覗き込む。

「…どうかした」

「い、いえ、あの…」

それじゃ、会えなくなっちゃう。

顔、見れなくなっちゃう。

あたしは、スカートのポケットの中の携帯を、布地の上からきつく握りしめた。

分かってる。

あたしにそんなこと言う権利なんか微塵もないの、分かってる。

でも、だから。

「く…九条さん」

「ん？」

「あ、あたし…携帯、今日から使えないんです。今月、ちょっと苦しくて。料金未払いで止められちゃいました」

嘘。

神様、ごめんなさい。

あたし嘘をつきました。

「そうなんだ…」

「だから、忘れても持ってきてても、毎日来ますね。…九条さんが待ちぼうけしないようにっ」

嘘を、胸中を悟られなくて、あたしは努めて明るく言う。

九条さんは、それを何の疑いもなく信じたようだった。

「そっか、分かった。じゃあ僕も待ってる」

そんな流れで、あたし達の午後五時の待ち合わせが始まった。

日付が変わっては、何も持たずに九条さんの会社に訪れる日々。

毎日毎日、決まったあの場所で、日が沈むのを眺めながら「未羽ちゃん」とあたしを呼ぶ、やさしい声を待つ。

もちろん、こんな毎日日本気でシャツを忘れているわけじゃなかった。最初の日以外は、全部わざとだったのだ。

平穏で、何の変哲もない、安息感に包まれたゆるやかな幸福を噛み締める。

あたしは確かに、九条さんと一緒にいる時間が大好きだった。たまらなく好きだった。

今日、学校で何があったとか、嫌いな先生の愚痴とか、テレビの話とか。

他愛のない話を、彼は嫌な顔一つせず聞いてくれた。一緒になって、ノってさえくれた。

時には九条さんが、あたしにこれまた同じように嫌味つたらしい上司の愚痴を言っていたこともあった。

二度、晩ご飯にも連れていつてくれた。

そうやって、三週間。

ある日、あたしはひなの様子がおかしいことに気づいた。

前はあれほど進展はあったのかってうるさかったのに、ここしばらくあの小悪魔的な笑顔を見ていない。

それに休み時間の度、必ず誰かとずっとメールをしていた。

… なんてだろう。

胸に、一陣の風が吹いた。

さん。ときめきイベントとお誘い（前書き）

一週遅れで申し訳ございませんm（――）m思いがけないハプニングがちょっとありまして…（汗）では三話目、どうぞ^ ^

さん。ときめきイベントとお誘い

残暑がまだまだ残る九月。あたしと九条さんが出会ってから、約一  
月が経っていた。<sup>つき</sup>

いつも座って待っているコンクリートに今日も相変わらず腰掛けて、  
あたしはその九条さんを待つ。

段々暗くなってゆく辺りを見回しながら、首をかしげた。

…なんだろ。今日は遅いなあ。いつもは夕陽になるかならなかった  
て感じの時間帯に来るのに、今日はもう半分以上沈みかけてる。

仕事忙しいのかな？

…なによ、もう。皆して忙しいって言っちゃって。

脳裏に浮かんだのはひなの顔。

今日の昼のことだった。

弁当を食べおわってふと向かい側に座っていたひなを見たら、せわ  
しなくカチカチと携帯を打ってるものだから、またメールしてるの  
かと思って軽い気持ちで声をかけたのだ。

そしたらあの女。何て言ったと思う！？

「今忙しいから話しかけないで」

だよ！？ひどくない！？

そこまで忙しいメールって何なのよ！！

この間から一体誰とメールしてるの！？

疑問符が次から次へと浮かんでは消えた。

そもそもあたしは、何でこんなにひなのメール相手が気に掛かっているんだろう。

不思議と自分でも分からなかった。

ただ　とにかく心がざわつくのだ。

あたしの知らないところで何かが起こっている気がして　。

「未羽ちゃん」

待ち焦がれていた声に呼ばれてはっと気がつけば、そこにはもう車のキーを持って淡く笑う九条さんがいた。

「すみません。また気づかなくて…」

また、っていうのはあたしが今みたいなパターンをよくやるから。

考えこんでて気づかない。

あたしの悪い癖。



「今日もワイシャツは………持つてきてないみたいだね」

九条さんが、分かってたけど……と笑った。

「うあ……すみません」

恥ずかしさに顔を染めてうつむく。

ワイシャツは……わざと忘れてる日がほとんどだったけど、たまーに本気で忘れる日もあるのだ。

今日は本気で忘れてた。

そして、思う。……そろそろきついよね、この設定も。

一ヶ月携帯未払で止まってるってどんだけ？って話だし、ワイシャツだって普通に考えてさあ……。

あーあ……そろそろ潮時、かなあ。

「行こっか」

「あつ、はい」

またぼーっとしてたあたしは、九条さんに促されてコンクリートから腰を浮かしたのだけれど。

つて、え？

『行こっか』って言ったよね？今！？

「あああああの一？い、行こっかって」

赤くなつてあたふたするあたしを見て九条さんはまた笑う。っていうより、吹き出した。

「ぶっ、未羽ちゃん慌てすぎ。ついておいで。今日は送るよー」

そう言つて歩き始めた彼の後ろ姿を、あたしは数秒見送つて。

今日は送るよ今日は送るよ今日は送るよ…

今日は送るよー！？！？

つてその、やっぱりアレだよね！？

くくくく九条さんの車に乗っちゃうっていう

！

なにこのときめきイベント~~~~ッッ！！！！

声にならない叫びを胸の内に秘め、脳内あたしがじたばたする。

急いで九条さんに追いつくと、運転席に回る彼とは反対側に、助手席に回った。

「の…乗っちゃっていいんですか」

「うん。どうぞ」

その言葉を受けて恐る恐る扉を開ける。

ふわっと、あの時シャツから香ったのと同じ香りがした。

うっはあ…。

はっ、また変態癖が！いけないいけない。

ぶるぶるっと頭を振って、シートに座る。それを見届けて九条さんも車に乗り込んだ。

ボタン、と扉が閉まる。

「　　っ、」

あ、ヤバイ！これはヤバイ！！

軽の運転席と助手席って、実はめっちゃめっちゃ距離近い！

想像以上の刺激に心臓がどくどくいっておさまらない。

ああもう…顔があつい。

「未羽ちゃん、出て右だよね」

そんなあたしなんか露知らず。

九条さんは平然とあたりまえの質問をしてくれた。

あ、そっか。家の場所説明しなきゃいけないのか。

「そ、そうです。で、次の信号で右に曲がって」

「え？どっち？こっちの信号？」

指差すほうを見ると、ここから同じくらいの距離のところであつた、信号が鎮座している様子が入ってきた。

ああ、あそこ間違える人が多いんだよな。

まだ駐車場から出ていない車内で、説明すべくあたしは無意識の内に車のシートに膝立ちし、身を乗り出していた。

すぐ右隣には、九条さんがいたことも忘れて。

「う、あ？      きゃッ」

狭い車内で膝立ちなんて、やっぱり無理があつた。

一瞬でバランスを崩したあたしは、そのまま思い切り運転席に座る九条さんの足のうえに倒れこんだのだ。

「……っ、」

一瞬、ときが止まる。

あああああたしのばかり！

ハンドルにちよつと頭をぶつけたんだらう、鈍い痛みで脳が覚醒する。

と同時に、一気に顔が赤く染まった。

ふつつつと湧いてくるのは羞恥心と。

「未羽ちゃん」

ほんの少しの、期待。

…九条さんの大きな手が、よつんばいになったまんまのあたしを助け起こす。

「ごっ、ごめんなさい九条さん！すぐどけますからっ、あの、そのっ…」

そこまで言ってから、あたしは二の句がつけなくなってしまった。

…ひどく真面目な、九条さんの端正な顔。

間近で視線を合わせたまま身じろぎもせず、ただお互いの息遣いだけが頭を支配する静寂。

触れられている腕が、あまくつよく痺れている気がして。

「く、じょうざ…」

のどからかすれた声が出た。その時、だった。九条さんの意外に大きい携帯の着信音が、メールを受信したことを知らせたのだ。

あたしはあからさまにびくん、と反応して、思い出したように九条

さんの上からどき、元の助手席のシートに納まった。

それを見届けてから、ふう、とため息をついた後、九条さんはポケットから携帯を取り出す。

…え？今の、何のため息？

あたし？あたしに対して？

…呆れた？

それが分からなくて、でも理由なんか聞けなくて。

携帯を見る九条さんの横顔を、ただそつと盗み見ることしかできない。

「…？」

あれ、なんか…表情が険しい。

いつでもふわつと綺麗に笑う彼だから、あたしはますます不安になっってしまう。

「…どうかしたんですか」

「うん？…ううん、何でも。大丈夫だよ」

ポンポン、と頭を叩かれた。

…なんとなく、これ以上は聞いてほしくないって言われているよう

で。

あたしはおとなしく口をつぐむしかないのだった。

「さ、行こうか」

声とともに車にエンジンがかかって、とうとう車はあたしの家へ向かって走り始める。

うわぁ…なんか…何て言うか…。

恥ずかしいっ！

今まで何度か晩ご飯に連れていってもらったこともある。

でも、その時は例外なく会社から歩いて移動していたから、実は車に乗るのは初めてなのだ。

何を話していいか、そもそも運転中の彼にペラペラと話しかけても良いものか。

普段、運転手を務めている父相手であつたなら全くしない気づかいをして、黙り込む。

ああでも　話したい。声が聞きたい。

…未羽ちゃん、って…呼んでほしい。

なんだか無性に泣きたくなって、からだのみぞおち辺りがきゅっと絞まった気がした。

「……？」

何とも言えない気分のまま顔を上げて外を見やると、そこはもうすぐ家の、ひとつ手前の信号だった。

く、車速い！

元々、家から学校までは徒歩で通える距離だ。

その中間地点の九条さんの会社から車で帰るとなれば、四、五分で着くのもあたりまえだろう。

せっかく神様から与えられたチャンスを、全て無駄にしたような気持ちで。

無意識に口からはあゝとこぼれたため息は、車の発信音にまぎれて消えた。

…隣の九条さんといえば。

駐車場を出てから、ずっと何かを考え込んでいるようだった。

うつん、駐車場を出てからじゃない。

あのメールを、見てからだ。

眉間に皺を寄せた九条さんもやっぱり麗しいけれど、それとは反対にざわつく心。



それを打ち消すために、あたしは大きな声をあげた。

「こ、こでいいです…ッ」

「え？」

おとなしかったあたしがいきなり声をあげたからか。

九条さんは驚いた顔をしてあたしの方を振り返った。

「ここから本当にすぐなんです。あたしの家。これ以上入っていくとちよつと道狭くなっちゃうから…」

これは事実だった。

「大丈夫だよ？運転ならかなり慣れてるし…」

そう言ってくれる九条さん。

嬉しいんです。嬉しいけれど。

「お願いです…ここで」

あたしは、あなたの隣にいます…嬉しい以上に、辛いんです。

あなたのそのすがめられた眼差しは。

一体、誰に向けられているんですか？

…ふつうじゃないあたしの様子を感じ取ったのか、訝しみながらも、<sup>いぶか</sup>

九条さんは黙って路肩に車を停めたのだった。

のろのろと降りる準備を始めるあたしから、九条さんは目を離さない。

顔が綺麗な分、九条さんのまっすぐな眼差しは、どこか鋭く感じさせられる。

意識しながらも気づかないフリをして。

「じゃあ…ありがとうございました」

ドアに手をかけた、その瞬間。

「未羽ちゃん！」

え……。

ぬくもりを感じたのは、右の手。

いきなりの展開に、今度はあたしが驚いた顔をして右の手に目をやると。

あたしのそれは、九条さんの左手に包まれていた。

「っ！」

その光景を認めた途端、瞬時に頬が赤く染まる。

自分でも容易に分かるほどに。

おさまっていたはずの心臓が嘘のように、またどくと脈を打ち出した。

なに！？どうして！？なんであたしの手があなたの綺麗な手の中に！

真っ赤な顔に、恥ずかしさと、何かあるんじゃないかって猜疑心さいぎしんから生理的に浮かんだ涙。

その時のあたしはよほど情けない顔をしていたと思う。

繋がれた手を凝視していた目線を、そのままおずおずとあげれば。

真剣な瞳とかち合った。

「あ……」

「未羽ちゃん。」

「は、はい」

「明日は、暇？」

「……はいっ？」

…予想していなかった言葉に、見事に声が裏返る。

「時間、ある？」

なおも問う九条さんの瞳は、真剣そのもの。

通った鼻筋。キリツとした眉。長い睫毛。

何より、その、漆黒の瞳。

気づいたときには、吸い込まれそうに「はい…」と答えていた。

けれどあたしをもっと驚愕させたのは、その次の言葉だった。

「海に、行かない？」

「…ふえ？」

「海に、行こうよ？」

「えっ…、ええー！ー！」

海！？海ってあの海！？海原の海！？The sea！？

なんで！どーして？っていうか…凄く嬉しい！！

「行くっ！行きます！行かせてくださいっ」

反射的に二つ返事でオーケーした。

海、大好きーッ。

瞳を輝かせてこくこくとうなずくあたし。

すると次の瞬間、九条さんは　　。

「そう…良かった」

…笑ったのだ。

いつもの綺麗な微笑じゃない、心の底からほっとしたような、相好を崩した笑顔で。

「」

ねえ…なんで？

なんでそんなに…ほっとしたように笑うんですか？

あたしが、あなたからの誘いを断るとでも思いましたか…？

断れるわけ、ない。

断れるわけ、ないよ…。

まだ笑ってあたしを見ている彼の顔を、どこかぼんやりと見つめながら。

あたしはそんなことを考えていた。

よん。行っちゃいます、海に

土曜日の朝。待ち合わせ三時間前に起きたあたしは少しでも見目を良くしようと奮闘した。

三時間後、できあがったあたしは結局いつも通りだった。

もーいいや、これで。

だってこれが無理してないあたしだもん、だなんて開き直りもいいとこだけど、事実なのだから仕方がない。

白いワンピースにサンダルといういかにもな出で立ちで外に出てみると、ここから100メートルは先の、昨日降ろしてもらった場所にもう九条さんが待っていた。

ふんぎゃあ！また心臓がうるさくなってます大佐！！

誰に言っただかとかくあたしは緊張度最高潮。

車に近づいてゆくにつれ、はっきりと九条さんの表情が読み取れるようになる。

キラースマイルだった。

あたしはしつかりやられた。

ああもう…先行き不安。

今日一日、あたしこの人の魅力に耐えられるんでしょうか…。

「未羽ちゃん、今日ありがとうね。いきなりだったのに」

車が走りだしてすぐ、九条さんがそんなことを申し訳なさそうに言った。

「な、なに言ってるんですか！？あたしが九条さんの誘い断るわけなっ…」

そこまで言って、あっと口をおさえた。

こんな恥ずかしい本音を叫ぶやつが一体どこにいるのよ、馬鹿ー！

羞恥に顔を染めて、うつむく。

驚いて瞬いていた九条さんの表情が、頭から離れない。

すると。

「未羽ちゃん。みーうちちゃん」

横からぼんぼん、と頭をとても優しく叩かれた。

どきん、と胸が鳴って顔をあげると、これまたすんごく優しく微笑んでいる九条さんがいた。

「ありがとう。嬉しいよ？」

「、」

ああ、もう！もう！もう！いちいち反則なんですあなた！！

あたしを殺す気なんですか！？

キュン死にという名の殺人です。

死なないように頑張ったあたしを盛大に誉めたいよ…。

九条さんからは見えないように顔を背けて、そつとため息をついたのだった。

そろそろ、走り始めて二十分。窓から見える風景からは段々と建物が消え、自然が多くなってきていた。

「あれ。そういえば、海ってどこの海行くんですか」

あたしはいまさらながらの疑問を感じて、ぶつけてみる。

「言ってなかったっけ。って言っても名前なんて知らないんだけどね、三十分かからないごく近場の海だよー？」

しよぼくてごめんね、と言って九条さんは視線をあたしからフロントガラスに戻した。

しよばいだなんてそんな！あなたと出かけられるなら例え農場だってパラダイスです！！



と、心のなかでは猛反論したのだけれど、あいにく口に出せるほどあたしは素直でもないし、あけっぴろげでもない。そんなことないです、嬉しいです。とだけ言うておくことにした。

九条さんは、そう？良かったと言って笑った。

車がまた静かになって、あたしの視線は自然に九条さんへ移る。

また脈が早まった。

もう、身体の反応だけは素直なんだから。

…運転してる姿も格好いい。さまになってる。

そんなことを真面目に思う。

窓のさんに右肘かけて頭乗せて左手一本でハンドル操作してる姿だとか、そのおかげでよく見える首筋だとか、力入れるたびに筋の浮く意外に筋肉質な腕だとか。

それらのひとつひとつに視線が吸い寄せられて、あたしは夢中で見入っていた。

沈黙も、なんだか心地よくて。

あたしは、時が止まっているような感覚に酔いしれていた。

「そんなに見られると恥ずかしいんだけど」

「えっ」

ひくつ、と息を呑んだ。

やましいことなんて何もしてないのに、やましいことをしていたのが見つかった気分！

いや、これってむしろ『やましいこと』！？

「き、気づいてたんですか?」

「そりやあね。こんな狭い車の中でじっと見つめられちゃ、さすがにいやでも気づくよ」

「お、教えてくださいよお」

「ごめん。なんかトリップしてるみたいだったから」

うう……。トリップしてたのかあたしは……。

「ほやーっとしてる顔も可愛かったよ？」

「ふえっ！？か、かわ……っ」

可愛いつて、言った、今？

幻聽！？

「うん、可愛い」

ぎゃあ——！！！！幻聴じゃない！！！！

真っ赤になってあたふたする。

どどどっしょう！嬉しい！しかも、さっき、ほやーっとしてる顔『も』可愛いって言ってたよねえ！？

あたし、聞き逃さなかったよ！？

『も』ってことはさ、その他も…。

ドキドキ鳴ってる心臓を意識しながら九条さんを見た。

って、もうふつーに運転に戻ってる！

がくつとうなだれる。

……うん？待てよ？

『ほやーっとしてる顔も可愛かったよ』って、あたしの顔も見てなきや分らないよね？それって、つまり…。

「み、見てたんですか！？」

「え？」

「あたしの『ほやーっとしてる顔』。ほやーっとしてる間、ずっと見てたんですか！？」

責めるように言い寄った。ほやーっとしてるって、つまり、ぼーっとしててアホ面だったってことでしょ？ずっとそれ、見られてたな

ら、最悪！

どうか違ってますように、と祈りを込めて九条さんの答えを待った。

彼は数秒、黙り込んだ末　　。

「……うん？さあ、あはは。どうだろう」

なんて、なんとも曖昧な答えをくれたのだった。

「海だーっ」

あれからすぐ、あたし達は目的の海に着いた。

結局例の答えは教えてもらえず、今に至っている。

もう気にしないからいいもん！

そんなことより、目の前には青い青い海！

快晴とまではいかないけど、真っ白な雲と、その合間から顔をのぞかせる空。

それに、砂。

あたしはサンダルを脱いで、足元に広がる砂を裸足でぎゅっと踏んだ。

それから、指で握ったり開いたりしてみる。

この感触、だーいすき！

「えっへへへへ」

しかも隣にいるのが九条さんときた。

これが、にやけられないでいるものかつ！

「未羽ちゃん…そうとうテンションあがってるね」

「そーですかっ？」

「だってずっと笑ってる。海、来て良かった？」

「うんっ、嬉しい！」

喜色満面の笑みで言った。

その後で、はっと気づく。

あたし、嬉しさのあまり今ふつーにタメ口使っちゃった…。

隣に立ってさっきまでのあたしと同じように風景を眺めている九条さんの横顔を、盗み見た。

…全然気にしてないどころか、九条さんこそがとても嬉しそうに笑っている。

「……………」

「良かったよ」

そう、前を向いたまま彼は唐突に呟いた。

「な、にがですか…？」

聞き返すと、横にいるあたしを振り返って、九条さんは微笑んだ。

いつものきらきら輝くキラースマイルじゃなくて…ただただ、やさしく、やわらかく微笑んだ笑顔。

「未羽ちゃんが、嬉しそうで」

「え？」

あたし　　？

「未羽ちゃんが笑っていると、僕も嬉しい」

だから、来て良かった。

九条さんは、穏やかな声音でそう続けたのだ。

あたしはなんだか、また胸がぎゅうつと絞めつけられる感覚がした。そして、その後、泣きたくなった。

理由なんか分からない。

ただ、どうしようもなく、切なくなったのだ。

「今日はきっと楽しくなるね」

九条さんが言う。少しはにかんだ笑顔で。

「っ、はい！」

あたしは答える。精一杯の笑顔で。

…今日一日で、分かるかな。

九条さんというと、こんなにも胸が絞めつけられる理由。

土曜の午前十一時。

こうして、あたしの人生初のデートは幕を開けたのだった。

よん。行っちゃいます、海に（後書き）

ごめんなさいm（——）mひたすらごめんなさいm（——）m思っ  
ていたより忙しくて更新日を隔週で日曜日にします 読んでてくだ  
さる方申し訳ありません（T——T）



## 「魔法使い誕生？」

「って言っても、昼食べてないから少しお腹空かない？」

九月にも入り、あまり人気のない海を散策しながら九条さんが言った。

昼ご飯、その単語にあたしはびくつと過剰反応をした。

なぜなら　　。

「あの…あたし、軽く食べられるもの作ってきたんです。食べますか？」

そう、サンドイッチを作ってきたのだ。失敗のない、安全パイのごくごくふつうのサンドイッチ。

そのまま流れに任せて、ずっと鞆の中に隠していたサンドイッチ用の穴が空いてる弁当箱を取り出して、突き付けた。

むしろ流れに任せなきゃ渡せないでしょ、これ？

「……………」

続くのは沈黙ばかりで、やばいおしつけがましかったか？と不安になる。

はらはらして半分涙目になった時、やっと九条さんが動いた。

背を少し曲げて、あたしの耳に口元を寄せる。

…え、何。

熱い吐息を首筋で感じた。

「ありがとう、すっごく嬉しい」

「ひゃあ!？」

そのまま、なめらかな白い手が、弁当箱を持ったあたしの手ごと優しく包み込んだ。

はつとして思わず取り落とす 瞬間に、九条さんがキャッチ。

「ちょっと、未羽ちゃん。手離しちゃ駄目でしょう、いくらなんでも」

「すすすいません!でもその、びっくりしてっ…」

「そう。首弱いんだね」

「なっ…!」

そついうことを言ってるのではなくね!?

「どっか座って食べようか、どこ座る?」

話聞いてないし!こっ、この人…意外に、てゆうか絶対、Sなのか  
もしれないっ!

「あ？普通にうまい」

九条さんが少なからず驚いたようにそう感想を述べた。

手にはレタスとハム、それにチーズをはさんだサンドイッチを持っている。これがあたしの一番のおすすめメニュー。

あの後、砂浜から道路へ続く階段の一番下に腰を降ろしたあたしたちは、海を正面に食事をとっていた。

「なんですか、その意外そうな声。ちょっと失礼ですっ」

「いや、ねえ？だって未羽ちゃんってあんまりこういうことできそうに見えないから」

笑ってしれつとまた失礼。

「そんなむくれないでよ、あはは。ごめんね？たださ、前も思ったけど未羽ちゃんって見た目に似合わずまめなことするんだよね、結構」

「それ、初めて会った朝も言っていましたよね？何なんですか一体い  
」

あたしってそんな見た目悪いだろうか。

「悪い意味で言ってるんじゃないよ？未羽ちゃん、見た目はまさに

今どきの子だからさ。もつと結構はじけてるのかな？って思っちゃってたんだよね」

確かに…あたしは見た目、明らかに清楚系じゃない。

どちらかっていうとギャル系だ。地顔が派手だから、着る服やメイクもどうしてもそっち系になってしまふのだ。

あたし個人としては、清楚系だって好きだし着たい。でも実際問題、好きと似合うはべつなのだ。

「ギャル系女子は嫌いですか」

ふてくされた感拔群で、俯きながら投げた問い。

「ううん。未羽ちゃんなら構わない」

それは、九条さんのあけすけな物言いに圧倒されて終わったのだった。

それ　　言っちゃいますか、本人の前でっ！

何事もなかったかのようにまたサンドイッチを食べ始めた九条さんを横目に、あたしは、赤い顔を見られまいと懸命に下を向くことしかできなかった。

あああたし…負けてる。

ご飯の後は、何がどうしてそうだったんだか、あたし達は棒倒しをやっていた。その辺で拾った適当な棒きれを砂浜に突き立て、

そこを中心に砂を盛る。

「九条さん、準備でき」

言いながら顔を上げたあたしは最後まで言葉を紡ぐことができなかった。

九条さんが驚くほど真面目な表情で、ただひたすらにあたしをじつと見つめていたからだ。

思い出したように心臓が脈を打ち始める。

もしかして　　ずっと？

はしゃぎながら砂もりもりやってんのずっと見られてた？

確かに手伝い少ないなあとは思ってたけど、それってあたしのことずっと見てたから！？

顔に全身の血液が集まったみたいだ。

どのくらいそうしていたのだろう、不意に九条さんが僕さ　　と  
口を開いた。

続きを聞こうと耳をそばだてた。

でも結局、続きは聞けなかった。

「きゃー、あははー！」

「えり、そんなに走ると怪我するわよ」

近くを通った親子連れの声にかき消されたからだだった。

「ごめん。なんでもない。やろつか、棒倒し」

につこりと微笑まれば、これ以上追及するのは憚<sup>はば</sup>られる。

あたしも何事も無かったように装って、初めに自分側の砂を思い切り手前に引き寄せた。

量にして大体三分の一ってとこかな？

「次、九条さん」

「よし。言つとくけど僕、棒倒し得意だよ？」

「えーで、でも、あたしだって得意ですから」

「そうなの？負けないけどねー」

「あ、たしだって負けませんっ」

生来の負けん気がたたって咄嗟にそう答えるけど、あたし、とことん可愛くない！

「じゃ、そこまで言うなら賭けしよっか」

ちょっとだけ自己嫌悪に陥っていたことなんて露知らず、九条さんはフラットにそんなことを言った。

「か、賭け？」

「負けた方が勝った方の言うこと、何でもひとつ聞く。これでどう賭けをもちかける九条さん、ほんと楽しそう…。」

キラキラしてて後光がさすかのようなあのキラースマイルじゃなくて、ただほんとに面白いことを発見した時のような、わくわくした笑顔であたしの返事を待っている。

ちよつと誰か、教えてよ。

こんな顔されて断れる人、いるっ!?

それにそれに。

あたしはよこしまな妄想をした。

あたしの言うことを二つ返事で聞く九条さん。

いい。なんか、すごく禁断の香りがして興奮する…。

うわぁ、思考、痴女。

「やる？やらない？」

そこにまた九条さんの追隨。

「やります！やらせて下さい」

あたしはあつさり煩惱に負けた。

その答えを受けて、九条さんが周り一周分の砂をかき寄せる。

それを確認して      うん、まだいける。

両横に残っていた砂を一気にとった。棒の周りに小さい山があるだけになる。

「こつからだよね、棒倒しは？」

言って九条さんは、また周り一周分結構思い切り砂を取った。

え、いきなりそれだけ取っちゃうの！？大丈夫なわけ？ていうか次あたしで倒れんじやないのコレ！！

心理的揺さぶり……？

ちら、と相手を伺うと意地の悪い笑顔でニコニコしている。

何が狙い！？

自分が混乱のどつぼにはまっていくのが分かった。

うう……、と頭を抱えてそのあと意を決して砂に手を伸ばす。えーい！

ザクッ。

「……………」



「……………」

…あ、れ？うそ、なんで？なんでこれで倒れないの…？

そこには、砂がなくなっても直立不動の木の棒が一本。

おかしいでしょう考えてもお！

「えー…と」

九条さんが恐る恐るといった感じで、もはや山ではなくなった砂をさらに深く掘り下げた。

パタン。

…倒れた。

一瞬の沈黙のあと、九条さんと目が合う。

そして、

「ふっ…」

「あはっ…」

どちらからともなく、笑い合った。あははは、と開けた空間に笑い声がこだまする。

「おかしいおかしい！未羽ちゃん砂浜に刺す力強すぎだよ」

「あたしのせいですかあ！？九条さんこそ何か仕掛けたんじゃないのー!?」

「しっつれーだなあ。してないってそんなことー」

万が一してたとしたら自分が勝てるように細工するって。九条さんはそう言ってけらけらと笑った。

こっぴう風に笑ってる九条さんも、好きだなと思った。

あとでわかったんだけど。

あたしはどうやら、棒倒しのセッティング方法から間違っていたらしい。

ふつつ、山を盛ってからその上に棒を立てるのに、あたしは地面の砂浜に直接立てていた。初めから、倒れるわけがなかったのだ。

ともあれ、軍配はあたしに上がった。セッティングを間違っていたとはいえ、棒を倒したのは九条さんだ。何でも言うことひとつ聞くという約束を果たしてもらわなければ。

「何を致しましょうか、お嬢様？」

キラースマイルでかしずかれる。

わあ、鼻血もん。

「えーとえーとその」

どうしよう、決めらんない！このシチュエーションおいしすぎるっ！

「か、帰るまでに考えときます！」

苦し紛れに出した答えに、

「そうですか。承知致しました」

九条さんはまたもキラースマイルでそう言うのだった。

その時、沸騰するあたしの頭にふと微かに子どもの泣き声が聞こえた気がした。

んん？気のせい？

訝しんで向かいの九条さんを見上げると、やっぱり気のせいじゃなかったようで、同じく不思議そうな顔をして辺りを見回している。

「…聞こえるよね？」

「はい、聞こえます」

「どこから……、あ」

あ、と声を洩らして見やった方向。あたしも目を向けると、泣きながらふらふらとこっちに向かって歩いて来る五歳くらいの女の子の姿が見受けられた。

て、いうかあの子、

「さっきの子！」

「え？」

「あの女の子、さっきあたし達の横通り過ぎてった親子連れの、子どもの方ですよ。ほら、九条さんが何か言おうとして、やめたときの」

そこまで言うてから、あつと口を抑えた。

…しまった。これは、ふれてほしくなさそうな話題だったのに。

「…なんでそこでそんな顔するかな」

悔しそうに唇を噛んだあたしの表情を読んで、九条さんが困ったように笑った。

「だって…」

九条さん、あの話にふれてほしくなさそうだったじゃん。あからさまに、空気変えたじゃん。そうでしょ？

…あたしに、聞いてほしくなかったんでしょ？

心のなかだけで問いかけた。

口に出せるほどあたしは九条さんと親しくない。

勇気もない。

「……………」

沈黙が訪れて、絶え間なく耳に届くのは女の子の声。

あたしは無言のまま体の向きを変えると、砂を蹴って女の子のそばにかけ寄った。

「どうしたの、お母さんは？」

「ふえ〜ん！あゝあゝ〜ん」

う、駄目だ。全く聞いてない。

助けを求めて無意識に後ろを振り返れば、九条さんもすぐそばに来てくれていた。

「無理そ？」

眉尻を下げてこくんとうなずくと、九条さんが女の子の目の前にしやがみこんだ。目の高さを同じにして、視線を合わせポンポン、とてもやさしく頭をたたく。

女の子は予想していなかった刺激に、ひくつと喉をならしてきょんとしていた。

うわ、泣き止んだ！

「お母さんどした？」

目元をやさしくゆるませて、九条さんが問い掛ける。

あ、あたしもそれやられたい！…なんて思ったことは秘密にしといて、

「もしかしてえりちゃん、はぐれちゃった？」

自分も九条さんの隣にしゃがんで、聞いてみる。

「……っ、な、なんで？」

帰ってきたのは疑問符。

「うん？」

「なんで、えりの名前、知ってるの」

いまだにおさまらないしゃっくりで肩を上下させながら、えりちゃんが不思議そうに尋ねる。

「へへ、なんでかなー？」

お姉ちゃん、魔法が使えるのかもねー？と笑ってやると、えりちゃんが一瞬きょんとして、今度は「うそ！」と目を輝かせた。

か…可愛い…。

ふと見れば、隣の九条さんもちよつと驚いてるみたい。へらつと笑ってさつきちよつと、とだけ言っておく。

「お母さん、一緒に探そうか。お姉ちゃんの魔法で」

「いいのっ？…うん、探すっ」

完全に泣き止んだえりちゃんの小さな手を取って、あたしは立ち上がる。

九条さんもそれに続いた。そうして、えりちゃんの空いてる左手をやさしく握ってやる。

「なんか完全に役どころ取られちゃったなあ」

頭上から聞こえる九条さんの声は苦笑まじりだ。

「九条さんが泣き止ませてくれたからですよ」

じゃなきゃあたし、話せなかったし。

海にきてから2時間半。

今日の残りのあたしは、どうやら魔法使いにならなければいけないようだった。

## こ。魔法使い誕生？（後書き）

やっと時間ができました！隔週とか言っときながらそれもできずに  
ごめんなさいm（――）mとにかく1月は、最重要事項な死活問題  
があつたのです。でも、これからまた週一更新していきますね（  
^-^）曜日は水曜でお願いいたします



ろく。終息、そして暗転。（前書き）

危ない！木曜日5分前（、、）汗

ろく。終息、そして暗転。

魔法使い（とその弟子だとえりちゃんに認識されているらしい）九条さんとともに、三人連れ立って、あたしたちは海から道路に上がった位置にあるみやげもの屋さんにきていた。

なぜここに来ることになったのかというと…話はつい五分ほど前にさかのぼる。

「えりちゃんさ、お母さんとはぐれちゃうまえ、お母さんなんか言  
つてなかった？」

と、九条さんが尋ねた。するとえりちゃんはこれ以上ないくらいに、  
快活に笑って言ったものだった。

「言ってた！」

ええ！？

もちろんあたしたちは驚いた。

「本当？なんて？」

「トイレ！」

「……………ん？」

「トイレ！」

「ト…?」

「うん、トイレ!」

なおも笑顔のえりちゃん。

「お母さんね、えりと離れちゃう前、トイレ行ってくつて言ってた!」

ええと…それって迷子って言わないんじゃない? (魔法使い一味一同)

「う、うん…ええと、ね? 待ってるって言われなかった?」

「言われた!」

「…なんで離れたかな?」

「分かんない」

…うん。どうしよう。どう手をつけていいんだ、コレ。

「つまり…えりちゃん自分からお母さんのそば離れたってこと?」

九条さんが噛み砕いて、再度えりちゃんに聞く。

「違うよ、えり自分で来たんじゃないよ、えり後つけてきたただけだもん」

だけどえりちゃんはそう言うのだ。

困り果てた表情で、あたしたちはアイコンタクトをとった。

えりちゃんが言うトイレは、ここから先500メートルの地点にある。砂浜から上がった道路沿いだ。

「後つけてきただけだもん」というえりちゃんの言葉からすると、行きはお母さんと一緒に、帰りは違う誰かと一緒にこの砂浜へ戻ってきたことになる。

でも一体、誰と？

この500メートルの距離。来年小学校、っていう女の子が一人で歩くには結構「飽きる」距離じゃないだろうか。

そうは思っただけけれど、誰と一緒にだったかなんて見当もつかない。それにここで聞いちゃ、魔法使いの名が廃る……！！

なんてありもしないプライドをぐうぐうと燃やしていたときあたしの目の前を、あるものが横切った。

目を睜<sup>みは</sup>る。それは、ふよふよといまだ空を泳ぎ続けているのだ。

「……………あ」

隣の九条さんも、同時に気づいたようで。

…そっか。もしかして。

「えりちゃん…あたしたちね、えりちゃんがなんの後つけてきたか知ってるよ？」

九条さんに目配せする。おいしいところは年上に、ってね。

九条さんはふつと笑って、ひとつ頷いた。

「とんぼ」

「!」

「とんぼの後、追っかけてここまで来たんだろ？」

そう。えりちゃんが後ついてきたのは、人じゃない。「とんぼ」だ。季節も九月上旬、気の早いとんぼならいくらでも出てくる頃だろう。

「そうだよ、なんで知ってるの、ほんとに魔法使いなんだね、すごい」

案の定そうだったみたいで、目をキラキラさせちゃってほんと、可愛い。

でもえりちゃん、将来きつとマシングントーク…。

想像して笑えた。

「それでね、えりね、おみやげなの」

…ん？今またなんか突拍子もない単語が。

「おみやげ？」

苦笑して聞く九条さん。

うわ、対処早くてすごいなあ。

あたしなんかまんま振り回されてるよ。

「そうなのおみやげなの、トイレ終わったらね帰る前買っつて」

だからお店に行くって言ってた。そう続けて      その直後、えり  
ちゃんは唐突に黙った。

「…おかあさん」

今の会話から思い出したのだろう。ジリジリと顔は歪んで、だんだんと「…う」という呻き声も漏れてきた。

あつ、やばい、泣っ      、

「うゝあゝああー、おかあさん、おかーさん」

いちゃったよやっぱりいいい…。

あたし、どこ、魔法使いよ馬鹿…。

くっそう、不甲斐ない。

けれど、直ぐにえりちゃんの泣き声は止んだ。

「っ、あ      」

…九条さんが、抱っこしたのだ。

しゃくりあげる小さな背中を、ポンポンと優しい手つきで叩く。

「僕、えりちゃんがおみやげ買うつて言ってるお店、分かるよ。連れていってあげる」

「っ、ほんと？おかあさんいる？えりおかあさんに会える？おかーさん怒ってない？」

矢継ぎ早に尋ねるえりちゃん、マシンガントークは健在だ！

「くっ…、分かんないけど、きつと待ってればお母さんもそこ来ると思う、よっ？」

どうやら九条さんもそれがおかしい様子、笑いを噛み殺しながらそれでも優しい声で答えている。

「じゃあ、行く。お店、行く」

えりちゃんのちっちゃな手が、九条さんの首にまわされ、ぎゅうっとしがみついた。

「！-」

うらやましい！代わりたいたい！

と、まあ、こんな感じで今に至るわけなのだけど。

みやげもの屋さんには、とりあえず着いたその時はお母さんがいな

かった。

また泣きだすかと思いきや。えりちゃんはすっかり忘れてしまった様子で、店内にある数々の品物に心奪われているようだった。

ガラスものやきらびやかなキーホルダー。はたまた変な置物だったり。

中でもえりちゃんはキラキラしたものが好きなようで、ガラス製品に興味津々だった。

棚に手をかけて、あーとかうーとか言葉にならない言葉をだだもらしている。

ああもう、可愛いっ。

一方九条さんは腕時計を見ていて、一人手持ちぶさたなあたしだ。

何とはなしに「メッセージコーナー」なる一角で足を止めてみる。

なるほど、メッセージコーナーだけあって、いろんなハガキやメッセージカードがディスプレイされていた。

どれも海をモチーフにしたものばかりで、見てるだけで心が和んだ。

やっぱりあたし、海好きだわ…。

しみじみと再確認。

あとなんか面白いもの、あるかな。



最上部の棚を見ると、

「うつわぁ」

な、なんてあたし好み！これ、欲しい！！

見つけたのはガラスの小瓶。市販薬のガラスビンくらいの大きで、コルクで栓がされているものだ。

中には、丸められた真つ白な紙きれが一枚。

そつ、映画とかでよく見るあれだ。

海な向かって「そーれウフフ」ってな感じのあれだ。

欲しい！これまじ欲しい！

いつ使うのかとか聞かれても分からないけれども！

何を書くんだとか言われても思い浮かばないんだけれども！

でも、憧れってあるじゃない！ロマンってあるじゃない！

つまりは、そういうことなのよ！

ああ、でもこういつのつて意外と高いんだよな。

…いくら？げつ、600円！

ううう…バイトもしてない女子高生には痛い…。

ああ、でもコレすっごく欲し、

「これ、欲しいの?」

「うっひゃああ!?!」

な、な、な、な!?!びつくりしたあ!一人の世界に入ってたのに、いきなり話しかけるからっ。

「く、九条さんっ?いいいきなり後ろから話し掛けなください、しかも耳のそばでっ!」

まっかになりながら後ろを振り返った。

なんのこと?とでもいいたげな九条さんの笑顔が、そこにある。

ううっ、やっぱりっ?

「買いましょうか、お嬢様」

はっとした。そうだ、あたしにはこの手があったんだ!

棒倒しの勝者に与えられた、特権。

「…でも、あの、命令とかで買ってもらうのは違っっていうか」

あたしなんの分際で何言ってるの!?!とは一瞬思ったけれど、本音だ。

こーゆーのは、気持ちがあるからこそ、きつと嬉しいもののはずなんだ。

だから、勝ったから買ってもらっ、とか。負けたから買ってあげる、とか。

…そういうのは、どうしても嫌だったの。

九条さんはあたしの言いたいところを瞬時に掴んだらしい。

うんそうだよ。僕もそう思う。

そう、静かに笑った。

「でもね未羽ちゃん、だからだよ」

「へ？」

「そうやって考えられる未羽ちゃんだから。だから『僕が』、『僕の意志』で、あげたいんだ」

だからこれは、僕のわがまま。

ふんわりと笑って言われれば、返す言葉もない。

ぽーっとした思考のまま、思わず「はい…」と答えそうになれば、同時に、この店のドアベルがけたたましく鳴った。

「えり！」

えっ？

慌ただしい様子で店にかけこんできたのは、緩やかに波打つ黒髪で、上は白のカーディガン、下は水色のフレアスカートをはいた、まぎれもないえりちゃんのお母さんだった。

「おかーさん！」

ぱつと嬉しそうな声が背後からあがつて、今の今までガラス細工を見ていただろうえりちゃんが、あたしたちの横を通り抜けていく。  
「もう、動くなつて言ったのにあんたは…っ！ケガとかないの！？大丈夫なの！？」

「うん！あのねあのお姉ちゃんとお兄ちゃんが魔法使いなの、だからえり大丈夫なの」

「え？魔法つか…」

困惑ぎみのお母さんの声が聞こえる。

ふっ、そりゃそうだ。なんのことが分かんないよね。

だけど、さすがはお母さん。えりちゃんの一言で事情を察したらしく、狭い店内のなかあたしたちの姿を見つけると、ぺこつと会釈をし「すいません、ありがとうございます」と言葉までくれたのだ。

呆氣にとられながらも、あたしも笑って「いいえー」と返せば、九条さんは「えりちゃん、すっごくいい子でしたよ」と大人の対応をしている。

そのあと、えりちゃん親子は約束のおみやげの品を購入して、何度もおじぎしなから帰っていった。

帰りぎわ、えりちゃんから「ありがとう！魔法使いとその弟子！」と言われたことは、きっと、一生忘れない。

「やー、騒がしい子だったね」

「はい。でも、楽しかったです」

それに、子煩悩な九条さんが見れて、ぶっちゃけ得した感じいっぱい。

「それで？どうするの、買う？」

「あつ、と…その」

まだ決められないあたしに、九条さんはぽんと頭に手を置いた。

「僕、ちよっとトイレ行ってくるから。それまでに決めといてくれればいいーよ」

あーあ…氣い使わせちゃったな。

心のなかではそう思うのに、現実のあたしはただこくりと頷くだけ。

九条さんはそれを見届けると、「落とすと駄目だから」とあたしに携帯を預け、店内から出ていったのだった。

「はあ…」

で、そのあとのあたし。

正直、めちゃめちゃあのガラスビン、欲しい。九条さんもああ言うてくれてるし！ちょっとくらい、甘えちゃってもいいかな？

なんて、考えてる。

今日の記念になるものも欲しいし。いいよね？

うん、よしっ。買ってもらっちゃおう！

考えがまとまったところで、気になるものがあつた。

あたしはおずおずと手のなかに納まっている黒い携帯を見下ろす。  
さっきからめちゃめちゃ存在感出しまくりの、く、く、く、九条さんの  
けーたいっ！

妙に緊張しちゃうこの気持ち、分かるかなあ！？分かるよねえ！？

あ、開けたい！パカッ、て開けちゃいたい！

いいえ、だめ、だめよ未羽っ。それは人としてやっちゃいけないこ  
っ、

ブーッ、ブーッ、ブーッ。

「うっはあああッ！ー！」

あたしは思い切りびっくりした。

メ、メールきた！いや、電話！？

どっちだか分かんない！！

いいの？いいの、コレ！？

この静かな店ん中に、超響いちゃってるんだけど！

こ、心なしか店員の視線が痛い。さっき奇声もあげたし、何より、マナーモードにしても意外にバイブレーションってうるさい。

仕方なく、あたしはバイブレーションを止めるべく携帯を開くことにした。メールだった。

でも……やめておけばよかったんだ。

あたしは死ぬほど後悔する。人のプライベートなんて、覗くもんじやない。

軽い気持ちで押した、決定ボタン。

受信したメールの送り主の名前は。

“黒瀬ひな”

…そう。

ひなのもの、だったんだ。

なな。消した想い

天国にいたはずだったのに、いきなり地獄に突き落とされた。  
…そんな感じだった。

ついさっきまで目の前で震えていた携帯は、寸分変わらず明らかに九条さんのもの。そして、液晶画面に映っていたのも、間違いなくひなの名前だった。

嘘だ、まさか　　という気持ちと、なんとなく、ああやっぱりな  
という気持ち。

あたしの中身が何か真っ黒で空虚なものになった気がして、目の前  
が霞んで見えなくなった。

ああそうか　　。

合点がいったのだ。

ここ最近のひなの様子。尋常じゃない『誰かとの』メールの数。あ  
たしへの態度。

やけに必死だったひなのメール相手は　　九条さんだったんだ。

あは…道理で嫌な予感がするわけだ。あのひなが本気で必死になっ  
てメールしてんだもん。なんか変だと思った。

…ねえひな。どうして言ってくれなかったの？それに、あたしは一  
体何に対してショック受けてんの…？



ひながあたしにだまって九条さんと連絡取り合っていたこと？

それとも 九条さんが九条さんでなくなるときのあの眼差しが、全部、ひなに向けられていたんだっていう、事実？

分かんないよ。あたしは っ、

チリンチリン。

ビクリと身体が震えた。

九条さんが戻って来たのだ。

「未羽ちゃん、決まっ……………どうしたの？なんかあった…？」

変わらない彼の笑顔。今はそれを見るのが、辛い。

でも、だめ。知られちゃいけない。あたしが九条さんの携帯を勝手に開いたこと。

たとえ不可抗力だとしても、ひなと連絡取り合っていることに気づいたことを、決して知られてはいけない。

大丈夫。受信完了画面は見たけど、メール自体は開いていない。表示は何も変わっていないはず。あたしさえうまくやれば。

「ううん、大丈夫です。…なんにも、ないです」

ちゃんと、笑えた、はず。

九条さんは何か言いたそうな顔をしていたけれど、あたしがそれを遮った。

お願いだから、なにも聞かないで。

…知らんぷりしててよ。

「九条さん？あたし、決めましたよ」

「？えつと…」

「やだ、この短時間で忘れちゃったんですかー、もう。あれ」

と、意識的に笑いながら指差したのはメッセージコーナーの最上部の棚。

「ああ。ガラスビン。どうするの？」

「買って、くれるんですよね？」

かがんで、挑戦的な目で下から覗き込んでやった。

九条さんは一瞬目を瞠ったあと、

「お嬢様の、仰せのままに」

変わらない笑顔で、ほほえんだのだった。

。

外に出てみればもう、太陽は夕方のやわらかい光に変わっている。

水面が陽射しを反射してキラキラと輝いていて、あたしは思わず目を細めた。生ぬるい風が頬を撫でて、髪を一房さらってゆく。

みやげもの屋さんからまた砂浜に戻ってきたあたし達は、海に来てからこっち、ここで初めてゆっくり話をした。ここぞとばかりに今まで聞きたくても聞けなかったことを聞く。

「あろう…」

「ん？」

あたし達は今並んで砂浜に座っているわけだけど、こちらを振り返った彼がキラースマイルでつい一瞬<sup>ひる</sup>怯んでしまう。

うつ、弱いんだってばその笑顔…。

「九条さんって、実のところ何者なんですか？」

「実のところって…。そこ、気になるところ？」

「はい！気になります！」

「…二十三」

「…うえっ？」

「あれ、何その反応。二十三だよ」

に…二十三？

「えっと…意外と若いん、です、ね？」

「そう？そんなことないけど」

「ううん…、いや。逆に、思ってたより歳、うえなのかも？あれ？でも、やっぱり落ち着きようが二十後半みたいな感じだし…でも顔はやっぱり二十くらいにも見えるし」

「未羽ちゃん、声。ただ漏れたから」

「え！！」

恥ずかしい！

とつさに九条さんをみゃれば、くつくつとのどで笑っていた。

あ、また…。こんな笑い方でもカッコいい…。

ひなは知ってるのかな。九条さんの笑い方。

ふとそんなことを思っ、すぐに首を振る。

今は、それより九条さんのこといっぱい知ろう。時間がもったいないし。

「それで、あの。誕生日とか血液型とか」

「うわ、なんかベタなのきたねえ」

「重要ですからっ」

「力いっぱいだねー。そんな知りたい？」

「もちろん」

「誕生日は…九月三日で」

「ええ！三日前じゃないですかッ」

あたしどれだけタイミング悪、

「うんまあ嘘だけど。本当は十五日」

九条さんはどれだけ意地悪なんだろう。うん…なんか分かってきたけどね？

でも、本気で焦ったんですけど。しかも十五日って結局近いし。

「あと血液型は…」

と、こともなげに続けるのは九条さんの口。

ええい、反応するのはこの耳かつ。

「未羽ちゃん、当ててよ」

「あたし！？」

「四分の一の確率でしょ。一発で当たらなかったら、未羽ちゃん罰ゲームね」

何それ！！何そのめちゃくちや不条理なゲーム？

あたしのメリットは果たしてあるんでしょうか！？

「ちなみに罰ゲームとは」

「…デコピン？」

キラスマイルで言いますか、それ！

「ほら。何型？」

「う…」

どれだろう。ぱつと見A型っぽいんだけど…今日一日でその見解はあてにできなくなったし。マイペースな所はBっぽいけどおおらかな感じがO型。もういっそ、全部ひっくるめて変人な感じがAB型  
ー！？

「だから、声に出てるって！」

九条さんは大笑いした。

「僕、変人啊ゝ。未羽ちゃんに言われると正直ショックだ」

「そそ、そんなつもりで言ったんじゃないありません！」

「分かつてる分かつてる」

片手を上げて制する九条さん。肩は今だに震えてる。…あたしに対する笑いで。無意識にぷくつと頬を膨らますと、九条さんが「ごめんすねないで」と淡く笑う。

「それで、結論は？」

「…………… A」

色々考えたけれど、基盤として真面目な感じ、誠実な感じはやっぱ何を差し置いてもA型な気がした。

答えを待つけれど、反応がない。

「あの、九条さん？」

「…はずれ。罰ゲームだね」

「はずれですか!？」

「はい、前髪あげて」

おでこ出して、と右手が伸ばされる。

接近する骨張った、それでいて綺麗な手に、自分でもびっくりするくらい心臓が早鐘を打った。

ああでも今そんなことより!!

「ちょちょ、ちょっと待ってください！ほんとにやるんですか！？やるんですか！？あたし、デコピン無理です怖いです痛いです！」

「だーめ。約束でしょ」

なおも追随の手は止めず九条さんが完全に向き合い、左手であたしの肩を逃げられないように捕まえた。

いつもならどきどきするこんなシチュエーションも、今じゃ通用しないっ。デコピンにはトラウマがあるのよーっ！

九条さんの指が額に照準を合わせ、

ああもう、だめ…。

ぴたりと、止まる。

「嘘だよ、当たり」

「…ふえ？」

「A型だから、僕」

一瞬、言ってることが理解できなかった。

え、えーがた？

…A型なの？



「 なっ、何でそんな嘘つくんですかっ！？あた、あたし、ほんとにデコピンされるかと思ってー！」

涙目になれば、九条さんが焦ったようにあたしの頭に手を置いた。

「ごめん、慌てぶりが面白かったからつい」

そのまま、くしゃっと頭を撫でられる。

ああ どうせあたしはこの笑顔に勝てないんだ。

無言で首肯すれば、ほっとしたように力を抜いて、九条さんの身体が離れていった。 一瞬寂しいと思ったことは、口が裂けても言えない。

「…綺麗だね」

一瞬の沈黙のあと、ふいに九条さんが呟く。

視線はまっすぐ海に向けられていて、見れば、沈みかけの太陽がまばゆいオレンジ色に輝いて、水面を照らし、雲に色を移し、世界を橙色に染めあげていた。

ほとんど無意識で、「はい…」と返す。

どこかぼんやりとしながら、それでもこの心地よい空気に身を任せ  
る。

ありきたりではあるけれど、その時確かにあたしは 時間が止  
まってほしい 心から、そう思った。

思っ、いたのに。

ピリリリリ、ピリリリリ。

夢心地の空間は、突如として切り裂かれる。

着信は、九条さんだった。

画面を見てつと考え込んだあと、あたしに視線をよこす。

だれ？…まさか、ひな？

あたしの不安そうな表情から心中察したのかどうかは分からない。  
でも、電話に出るかと思いきや、九条さんはそのまま携帯を閉じて、  
ポケットに戻そうとしたのだ。

「で、でなくていいんですか！？」

「うん」

あまりにも迷いなく答えられるものだから、逆にこちらのほうが不安なってしまう。

出たほうがいいんじゃないの…？だって、メールじゃなくて、電話だよ？何か、どうしても大事な用なんじゃないの？

そうは思っけれど、言えないあたしがいた。

……………うん。言いたくない、あたしがいた。

着信はそれから10秒程して止まったけど、そのあとの九条さんは、あの、あたしが知らない表情をする彼になってしまった。

着信がひなだった保証なんてない。でもあたしは、ひなだと信じて疑っていなかった。嫌な予感って、当たるものでしょう…？

ふ、と自嘲気味な笑みが零れた。

脳裏に、あの小悪魔的な笑顔が浮かぶ。

高校入って、初めて芯から仲良くなった友達。そりゃ、ちょっと手に負えない所はあるけれど、やりすぎなところもあるけれど、ひなはいつだってあたしのためを思って全ての行動を起こしてくれていた。

クラスに馴染めないあたしを、あつという間に輪に引き込んでくれた人物。正直、泣くくらい嬉しかったのを覚えている。

あの時からあたしはひなのことが大好きで、あたしたちは  
唯  
一無二の、親友だ。

…今度はあたしの番じゃないの？

あたしが、ひなのために何かしてあげる番じゃないの…？

そうだよ、大丈夫。…あたしは、まだ、引き返せる。

「…九条さん」

「ん？」

「電話、かけ直しましょうよ？」

笑って言う。

「でも」

「あたしのことは、気にしないでーですから、ほらっ」

「…本当に、いいの」

「だあいじょーぶですっ、てば！逆にあたしの方が気になって仕方ないんですもん。ほら、早く」

急かすと、渋々と言った感じで九条さんは腰をあげる。

「じゃあ僕、車の方に行って話してくるけど…」

「はい、時間も時間だし、あと少ししたらあたしもそっち行きますから。遠慮せず電話して下さいっ」

笑顔で、九条さんの背中を見送った。

「　　っ、」

一人になった海岸で、あたしはおもむろに鞆からあるものを取り出す。

ガラスの小瓶だ。

さつき、お店で九条さんに買ってもらったやつ。

眼前で左右に振ると、中に入った丸められた純白の紙が、カラカラとかすかに音をたてて転がった。

ガラスを通して見るオレンジ色の太陽が、ゆれて、霞んだ。

…ガラスを通したから光が屈折したんだと思った。

違った。涙だった。

「はっ　、　」

息を止めて、声を殺して。後ろをいく、九条さんに気づかれないように。

頬を伝わる幾筋もの涙を乱暴に手の甲で拭って、それから大きく息を吸って次に取り出したのは、セットで買ってもらった油性ペンだ。

コルクの蓋を開けて、紙を取り出す。膝のうえに小さな紙を広げて、一気にペンを走らせた。

『好きです』

書いたのは、たった一言。

でも、この先口にだすことはないであろう、一言。

そっだよ。あたしは、九条さんが好き。

いま、この局面になってはつきり自覚した。

馬鹿なあたし。いつだってタイミングが悪いのだ。

それから、震える手をコントロールしながら首からネックレスを外した。それも紙と一緒にガラスビンに入れて、蓋をする。

今、この時。確かにこの思いが存在した証を、残すために。

それからあたしは立ち上がって      勢いよく、海に向かって小瓶を投げ入れた。

小さなガラスビンは、幾重にも重なる波に飲まれて、消えた。

## はち。あふれた想い

帰りの車の中では、終始他愛の無い話をしていた。何事もなかったように、笑った。…あたしの『想い』は、あの小さなガラスビンと共に消したから。

時折、九条さんが黙り込むことがあって、最初は何か感付かれたのか、それともまださっきの電話の件を気にしているのかと思っただけで、どうやら違うらしい。彼も彼でまた、あたしに話したいことがあるようだった。

口を開きかけては、逡巡して閉じる。その繰り返し。

…ひな関係、かな。

あたしも未練がましい。想いは捨てたはずなのに、聞きたくないと思っている自分がいる。

結局、最後まで『その話』をすることはなく。聞くこともなく。

車は、今朝乗せてもらった場所に到着したのだった。

「今日はありがとうございました。楽しかったです」

色々衝撃的なことはあったし、切ない想いも沢山したし。それに、きつと 生涯忘れないようなこともあったけど。

でも、今日のあの時間が楽しかったっていうのは事実だ。

あたしはシートベルトを外して深々と頭を下げた。

「どういたしまして。僕も楽しかった」

「そうですか、良かったです…」

独りよがりじゃなくて、良かった。九条さんに笑ってもらえて…良かった。

「それじゃあ、これで。月曜、今度こそワイシャツ返しに行きますから」

人質みたいにとってあったあの白いワイシャツとも、そろそろおさらばだ。

「月曜…か」

九条さんが呟いて、嘆息する。都合悪いのかな？

「…未羽ちゃん」

「はい」

「あのさ。もし、返せない事態になったら  
返せなくても気に  
しないでね。そうしたら未羽ちゃんにあげる」

「え…」

返せない、事態？何それ…一体どんな？



「よく、わかんないですけど…」

「返事は」

「え」

「返事は」

二度繰り返す。肯定以外の返事を受け付けない妙な迫力があつたら、はいと返事をした。

すると、九条さんが少しだけ泣き笑いみたいに笑った。

胸がしめつけられた。

どうして今、そんな顔するの。

手を、伸ばしたくなるじゃない。

…触れたく、なるじゃない。

想いを振り切るように、取っ手に手を掛けて扉を開ける。

「さようなら。ありがとうございましたっ」

「…うん。ばいばい」

勢いそのままにドアを閉めれば、車のエンジン音が遠ざかる。

胸の痛みには気づかないフリをして、あたしも歩きだしたのだった。

その日の夜。あたしは、泣きながら眠った。どこにこんな、  
と思うくらい涙を流した。

あのワイシャツを抱きしめて眠りたかったけど、しわくちやになっ  
てしまうと思うと実行できなかった。だから、ひたすら気の済むま  
で泣いた。

次の日の日曜は、ただぼーっとして過ごした。何もする気がおきな  
かった。夜になったらまた涙が溢れて止まらなかった。

そのまま夜が明けて、月曜の朝になった。

「未羽っ？どーしたの、それっ」

「ひな…」

朝教室に入って開口一番、言われた言葉がこれだ。

う…やっぱり腫れた目元はごまかせなかったみたい。

と、あたしの複雑な胸中なんかいざ知らず、次の瞬間ひなはこんな  
ことを言っただけだ。

「九条さんがらみいゝ？まったく未羽も隅におけないねえっ」

……はっ、はああああ！？

このムスメ、いったいどの面さげて…っ！！ニヤニヤした面さげてるけども…！あたしが一体どれほどの想いで九条さんを諦めたと。

…昨日おととい泣き腫らした甲斐あってか、どうやら憤慨できるくらいには情緒が安定したらしい。

「…っ」

「？みーっ？」

落ち着け。ひなはあたしが二人の関係に気づいたことを知らないんだから。

ここは何事もなかったように、明るく。

「九条さん？あの人は関係ないよ」

…うまく、笑えた。

「……………」

…あれ？予想と違う反応。何その顔？なんでそんな難しそうな顔してんの？

「ひ、ひな？」

「…ねえ未羽。土日のうちどっちか、九条さんと会ったりした？」

「え……」

「答えて。会ったの？」

…どうしよう。この場合、正直に答えるべき？

一瞬迷って、すぐにかぶりを振った。

答えは出てる。ひなに嘘はつきたくない。…まあついたところでひな相手に隠し通せるとも思えないけど。

「…うん、会った」

「そう。それで？なんか言ってた？」

いつになく真面目なひな。

ああやっぱり……。

ずしんときた。分かっていたことを無駄に再確認しちゃった感じ。

「ううん？大丈夫、九条さん何も言っていないよ」

「ふーん？ならいいけどお」

そのまま自分の考えに没頭し始めたひなをぼーっと見ていると、始業の鐘が鳴って聖子ちゃんが教室に姿を現した。

「聖子ちゃん来たよ」

まだ思考に耽<sup>ふけ</sup>りながら、ひなは自分の席へと戻ってゆく。立ち話状

態だったから、あたしも自分の席についた。

放課後：九条さんのところへ行かなきゃね。

鞆の上から、中にあるワイシャツを意識して撫でた。

ばいばい。

「ひな。ついてきてほしいんだけどー…」

SHRが終わった後、すぐさまあたしはひなに声をかけた。

「んー？九条さんのところお？」

帰り仕度をしながら答えが返る。

「…うん。今日、ワイシャツ返そうと思ってさ」

「えー？返しちゃうのお？」

「…そりゃあ、ね」

言いながら、そういえば昨日何か九条さん変なこと言ってたなあと  
思い当たったけれど、彼が言うような事態は微塵も期待：じゃない。  
想像できなかったから、ひなには黙っておくことにする。

「別に行ってもいいよ？」

「ありがとう」

あたしは 今日、ひなも車屋さんに連れてって、九条さんと会わせて、何も知らない振りして もちろん軽く、連絡取ってるんでしょ？くらいは言っただうえで ひなの背中をそれとなく押すつもりだった。

むしろ、それくらい早くくっついてくれなきゃあたしが諦めつかない。

だから、ひなが帰り支度終わるのを待ってすぐに教室をでた。

「五時まで時間あるじゃん。どうすんの？」

「んー…いつものマック行こうか？あたし、久しぶりにひなの話いろいろ聞きたいなあ。どーせ色々えげつない情報持ってるんでしょ」

「えげつないとはしつれーな！えっへん、しょうがないなあ。聞かせてあげる」

そう言っただけ彼女は不敵に笑う。やっぱり、ひなはこーでなくちゃ。

「よし、決まり。行きますか」

「れっつらごーごー」

そんなこんなで五時二十分。

あたしとひなは、揃って石段の上に腰掛け九条さんを待っていた。  
…ちなみにマックで聞いた様々なひな情報は、やっぱりえげつなか

った。

今は、ずっとワイシャツを返すときに言うつもりの台詞を、頭のなかで何度も繰り返し練習していた。

だめだあ…何度練習しても泣きそう。ひなだっているのに。

唇を噛みしめて俯いた。

ふと見れば、腕時計の針は五時三十五分。

…九条さん、遅くない？

もう少し待ってれば来るだろうと思い直した。けれど　その日、待てど暮らせど九条さんはこなかった。次の日も。その次の日も。

返せない事態になったら返せなくても気にしないでね

あの時の九条さんの言葉が頭をよぎる。

まさか、そんな…嘘でしょう？

…茫然自失としたまま三日が過ぎ。事態が動いたのはそんな時だった。

「未羽！」

教室に入るなりその声を荒げたひなが、次の瞬間信じられない言葉を発する。

「九条さん、転勤したんだって!!」

…一瞬。何を言われたのか、分からなかった。

「て…転勤？」

「そう。隣の隣の町に異動したんだってさ!」

「…っ」

…そうか。だからいくら待っても出てこなかったんだ…。

「未羽、いいの？」

「な、にが？」

「隣のそのまた隣の町だなんて、あたし達が簡単に十分か二十分で行ける距離じゃないよ!？」

「…そうだけど…ひなこそ」

「は？」

ひなこそいいの？

喉まででかかった言葉はかたちにならず。

…ただただ、ひなの剣呑な視線が痛い。

「あたしが、何？」



てか…なんであたしが責められるような形になってんの？もとはといえはひなが、

「はい席に着いてー！HR始めるよー」

びく、と過剰反応が起こった。

「…とにかく。ひな、あたしはもういいから。九条さんのことは…もういいの」

会話をシャットアウトする。ひなはそれ以上何を言うこともなく、自分の席へ戻っていったのだった。

授業中、先生の話なんて一切頭に入ってこなかった。

頭に思い浮かぶのは 九条さんのことばかり。

水かけられて謝ってくれたときの、申し訳なさそうな顔。

ワイシャツ貸してくれたときの、少し照れた顔。

神々しくさえあるキラースマイル。

少し悲しげな微笑。

真面目なときは一層際立つ綺麗な顔の造作。

車の運転をした時の仕草、その時の会話。

意外に意地悪だったことや、子煩悩なところ。

それから　やさしく、未羽ちゃんって呼ぶ声。

全部全部、覚えてる。

それなのに、忘れなきゃいけないの？

まだ、こんなに　好きなのに。

「　　っ」

そうだよ…。簡単に諦められる訳ない。

あたしだって、好きだった。好きだったんだもん…。

「　　っ…」

涙が溢れた。あたしにはまだ、伝えてないことがある。

なんだってまだこんなに泣いたまってるのよう…。

いい加減枯れたらどうなの。

まだ授業中だったから机に顔を押しつけて、声を殺した。隣の席の子が様子を伺う気配を感じたけど、そんなことに構ってられなかった。

しばらくそうしていると、肩を叩かれ、顔を上げる。涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔。

「未羽、さっきはごめ…ぎゃっ。なによおその顔っ」

いつの間にか昼休みになっていたらしい。

「ひな……」

名前を呟くとまた滝のように涙が頬を伝った。

「どおしたのよあつ！この授業時間の間に何が」

「ひな、あたし、あたしやっぱり」

「待って未羽！聞くから！話は聞くからちょっと待って！人のいないとこ行こっ？」

焦ったようにそう一気に言うと、ひなはあたしを屋上に連れ出した。

「ふいー。セーフセーフ」

「…なんでわざわざ」

「だあって皆興味津々に聞き耳たててんだもん」

これで周りに色々情報流れちゃ情報屋のあたしの名が廃るのよねー。

とかなんとかひとりごちるひな。 図太い。

「で、なあに、話って」

振り返るひなは最高に可愛い。

でも      だめなの。これだけは      譲れない。

「あたし…、あたしやっぱり九条さんが好きだよ。諦められない。何度考えてもだめ。ひなのことも大事なの…でも、九条さんのことが、好きで仕方ない」

一気に言った。正直な気持ちを全部。

そうなると、ひなの反応が怖かった。怖かったのに      恐る恐る視線を合わせれば、ひなは……笑っていた。

あの、小悪魔的笑顔。

「うつふふう、やっと言っただかこの意地っ張りい」

つん、と頬をつつかれる。

…え？えっ？

「未羽が九条さんのこと好きなのなんて、初めから分かってたよー。はいこれ」

目の前に掲げられたのは一枚の小さなメモ用紙。

「九条さんの新しい職場の住所。行くでしょ？」

間髪入れずに紙を奪いとる。

「わーすごい反応」

「これ…どうして」

「野暮なご質問。黒瀬ひな様をなめんじゃない」

にかつと笑って眼前にピースを突き出す。

「がんばれっ」

「でも」

ひなは？

「あと何か変な誤解してるみたいだから言っとくけどー。あたしと九条さん、特別な関係なんつにもないからね。勘違い。さっ、はーやーくー」

「でも、学校も…」

「未羽熱あるんじゃない？大変、早退しなきゃ」

大仰に言う。

「…あーうん、そうかもつ。あたし、帰る」

先生によろしくと階段を掛け降りた。

一度だけ振り返るとひなが手を振っていた。

ありがとう、ひな。

賭けてみよう、自分に。

見上げた空は、抜けるように青かった。

## きゆう。幸せをつかむために【最終話】

学校を出てすぐ、あたしは駅に向かった。確か電車があったはず。

出てくる時に教室から鞆は持ってきたから、最低限必要なものは手元にあった。

路線図を見る。      駅、見つけた。料金もそんなに高くない。

電車は後五分で来る。切符を買って改札を通り、ホームに入った。辺りの景色を見回すと、平日の昼だからか人はまばらで、閑散としている。

静かだ…。

息がつまっていたことに気づき、意識的に息を吐いた。

ここまで来たらもう後戻りはできない。      進むだけ。

ホームに電車が入り、音を立てて扉が開く。妙に緊張しながらそれでもしっかりした足取りで、あたしは電車に乗った。

想いを伝えるって決めたんだから。頑張れ。あたし。

「えっ、いない？」

意表をつかれる言葉だった。

二十分前。予定通りの駅で降りたあたしは、ひなからもらったメモを頼りに町を歩き、今の九条さんの勤務先であるという支店にたどり着いていた。

それなのにいないのだという。時刻は三時。普通ならまだ仕事してる時間だ。

「いないって、あの、今日休んでるとかですか？」

店の中にいた、人の良さそうな中年の男性を捕まえて事情を聞く。名前は村上さん。最初はびっくりされたけど、あたしのあまりの必死さに真面目に答えをくれたいい人だ。

眼鏡をかけてて白髪混じりの、柔和な笑顔の男性。

「休みじゃないんだけれどね。彼は今日午前上がりなんだ」

「じゃあさっきまではいたんですよね？」

「そうだね」

思いつきり入れ違いじゃん。やっぱあたしってタイミング悪い…。

せつかくの決意が崩れそう、と肩を落とす。

「君は…見たところ高校生だけど。どうしてこんな時間にここにいるのかな。しかもその制服は…この辺の学校ではないよね？」

ほほ笑みながら質問される。全然嫌味な感じがしない優しい言い方



だったから、つい、

「あの…幸せをつかまえに！」

「……………」

なんて一丁前なことを言って、きょとんとされてしまった。

おじさんはすぐに元の優しい笑みに戻り、ゆっくりと頷く。

「それは　　大事なことだ」

ほっ。

「だけどね、やっぱり学生の本分は勉強だ。それを忘れちゃいけないよ」

「……………はい」

重みのある言葉だなあ。

「だけど見たところ、今日の君は風邪で学校を早退したらしい」

「！」

「それならこの時間町にいるのも納得だ」

「あ…ありがとうございます」

それから　　と彼は続ける。

「九条くんは今日、行く所があると言っていたよ」

「え…」

「海へ行くと言っていた」

それを聞いた瞬間、あたしはまた泣きそうになっていた。

まだだ。まだ泣くな。

「…それ聞けただけで、充分です。ありがとうございます」

丁寧に頭を下げる。すると、その頭を優しく叩かれた。

「幸せ、つかんでくるんだよ」

「っ、はい…！」

その会話を最後に、あたしは店を飛び出した。

目指すは海、あの日の場所だ。

もう一度駅まで戻って、今度は海の最寄駅に停まる電車に乗った。

駅名はこの前海に行ったときに道路から見えたから、確認済みだ。

到着までの五分が、やけに長かった。

「いた…」

電車を降りて道路を渡り、眼科に砂浜を見下ろす。人っこひとりいない中、微かに動く背中が簡単に見つかった。

九条さんだ。間違いなく。

後ろ姿を見ただけで鼓動が高鳴り、気持ちかはやる。急いで階段を駆け下り、スカートの裾がはためくのも、跳ね返る砂が制服を汚すのも気にしない。今はただ 彼のところへ。

距離があと五メートル位のところで足音に気づいた彼が振り向いた。

「なつ       、未羽ちゃん」

顔がどうしてと言っていたけれど、今のあたしにその疑問に答える余裕はない。

ああ…九条さんだ。九条さんが目の前にいる。

あれほど待っても、会うことの出来なかった彼が。

今、こうして       あたしの名前を呼んでくれている。

視界が歪んだ。

どうして今まで分からなかったんだろう。       あたしはこの人に、  
一目惚れしていたんだ。

水をかけられたあの時から。ワイシャツを貸してくれた、あの時か

ら。

出会った瞬間から。

「ちょ、未羽ちゃんっ？どうして泣いて」

「好きですっ」

「…え？」

「好きです、好きなんです。あたし、九条さんのことがどうしようもなく好きなんです」

「ちょ、」

「いきなりごめんなさい、でももうだめです、好きなんです。好きで仕方な」

「ちょっと待って！」

いつの間にか五メートルあった距離は詰められていて、あたしは両肩をものすごい力で掴まれた。それではつと我に返る。

あたしは今、何を。

「分かったから。分かったからもう、勘弁して」

やっぱり迷惑なんだ…と涙がぼろぼろこぼれた。

「ああっ、違う違う、そうじゃなくて…」

「…？」

じゃあ…どういう？

「そのさ…二十も過ぎるとそんな率直に言われることなくなるから…恥ずかしくて」

掴まれた肩から腕へ、首筋へ、顔へ。おずおずと視線を辿ると、言われた通り九条さんの顔は 赤かった。

少し、だけど。

それを認めた瞬間、瞬時に羞恥心が沸き起こった。

あたし、勢いに任せてなんて告白を…！！

自分の顔も熱を持ったのが分かる。

「……………」

「……………」

双方沈黙。九条さんが掴んでいた肩を放し、ぎこちなく距離をとった。

その沈黙に気まずさを感じ始めた頃 。

「ふっ…」

九条さんが笑った。

「…な、何ですか」

「いや…黒瀬さんて凄いなと思って」

「えっ…」

ひな？なんでここでひな？やっぱり、そうなの？

また視界が潤んで、そしたら焦った九条さんが慌てて言葉を付け足した。

「違うよ、そういうんじゃない…その、今回のこと、実は黒瀬さんに頼まれたんだよね」

「…頼まれた？」

「うん。異動のこと、黙っててごめんね未羽ちゃん。本当は今週転勤することは、未羽ちゃんと会った時から分かったことだったんだ」

「じゃあ　　言ってくれたってよかったじゃないですか！」

あたしの声が午後の砂浜に響く。

「僕も何度も言おうと思ったよ。あの日海に誘ったのは、その為もあった」

「あつ　　」

だからあの日九条さんは、何度も口を開いたり閉じたりしていたんだ！…合点がいった。

「言おうと思ったんだ。でも、黒瀬さんに止められた。頼むから言ってくれるなつて」

「…どうしてそんなこと」

「『未羽は自分の気持ちも分かんないニブチンだから』って」

「なつ…」

「それから、同時にこうも言われた」

異動のことを黙って姿を消せば、未羽は自分の気持ちに嫌でも気づくから。そうなったらもうこっちのもんで、九条さんの職場まで追っ掛けても好きだって言いにいけますよ。だから、今は黙っててください。絶対、言いますから。いえ　　言わせますから。

「なんかもう、色々すごいよね。でもやっぱり僕だって好かれてる保証はなかったし、黙っていなくなるのは未羽ちゃんにかわいそうだと思った。だから言おうとしたんだよ、あの日のうちに」

それなのに　　九条さんは遠い目をした。

「我慢できなくて言おうと思ったび、黒瀬さんからジャストタイミングでメールやら電話やってくるんだもん。おちおち言えたもんじゃないよ」

九条さんが苦笑する。

メールやら電話……。

じゃあ      じゃあ、もしかして。

「ひなと連絡取り合ってたのは、その為……？」

「あれ、気づいてたの」

「えっ？あの、気づいてたっていうか……」

微妙な感じに口籠もるあたしに、九条さんは「ああ」と笑った。

「あの時か。携帯預けた時にメールがきたんだね」

「う、その……はい。勝手に見ちゃってすみません」

「いいよ。不可抗力でしょ？それより……返事してもいい？てゆうかするよ」

「      っ！」

いきなりの話題転換に、おさまりかけていた鼓動と体温がまた急激にあがった。

かつと身体が熱くなる。

自転車とかで転びそうになった時に、一瞬身体がボツとなって心臓がばくばくする感じにすごく似ていた。



はい、と返事をしたけれど語尾が裏返る。

緊張して、怖くなって、下を向く。目を瞑る。

だけど、耳に届いた言葉は。

「僕のほうが先だった」

完全にあたしの度肝を抜くものだった。

「…は？」

思わず素の弦きが出たほどだ。見ると、九条さんは苦笑している。

「未羽ちゃんは気づいてなかっただろうけどね、僕は君のことずっと見てたんだよ」

「???」

「…びつくりした？ 毎朝決まった時間に会社の前を通る女の子のこと、ずっと見てたよ」

言ってから九条さんは指折り数え始めた。

段差でつまずいたでしょ

鞆の中身ぶちまけたでしょ

信号無視したでしょ

ああそういえば一回二時間くらいの大遅刻したことあったよね？  
あれ僕事務所の中から見てたんだー

あの時大丈夫だった？

九条さんの口から出てくる言葉は、全部見覚えのあることばかりだった。心配までしてくれるというオマケつきだ。正直、顔から火が出る程恥ずかしい！

「あと…」

どうやらまだ続くらしいあたし観察日記に、慌てて歯止めをかけた。

「いいいいーですっ。もういいーですっ」

「そ？…じゃ違うこと教えてあげる。未羽ちゃんさ、僕との初対面の仕方覚えてる？」

「…へ？そりゃあ覚えてますよ。忘れられるわけ、ないじゃないですか」

あんな衝撃的な出会い方。あたしでなくとも忘れないに違いない。

「九条さんのまいた水が、間違つてあたしにかかっちゃったんですよね」

あの瞬間の情景が、脳裏にまざまざと思い浮かべられた。

「それ。実はさ…」

一旦言葉を切つて、視線を伏せる九条さん。

「な、なんですか…？」

「間違ったんじゃなくてわざとなんだ」

「」

…またもや声を、失った。

「ど、どうして」

「さっきも言っただじゃん。僕は、ずっと前から君のことを見てたっ  
て」

「…っ」

「ごめん。でもわざとって言うとは語弊があるかも。…自分でも無意識にやってたんだ。また、君が僕に気づかず通り過ぎてしまう。そう思ったら、なんかこう、手が勝手にバシッとね」

バシッとね、の所はご丁寧にパントマイムつきだ。

…それが本当なら。うわぁ、なんかもう。

「~~~~っ!」

「わっ」

抱きついた。もう我慢の限界だった。

「いいんですよっ？九条さん、あたしのこと好きだって  
う思って、いいんですよっ？」  
そ

知らず知らずのうちに涙ぐんでいた。

…嬉し涙だ。

九条さんの胸に顔を押しつけて、嗚咽をこらえる。

頭に柔らかい感触。手に乗せられていた。

「うん。僕は、君のことが好きだよ」

そのままぼぼふ、と頭を叩かれれば涙は増えるばかりで。

「ふっ…、うわぁん」

良かった…。気持ち伝えて、良かった…！

村上さん。あたし、幸せつかまえましたよ。

抜けるような青空の下、あたし達はいつまでも抱き合っていた。

それからあたしが落ち着くのを待つて、二人で海を後にした。

帰りは九条さんの車で、あの日あんなに暗く見えた外の風景が、やけに鮮明に色を映した。

右手は九条さんに握られている。

透真、と名前を呼ぶと、九条さんが凄い勢いで吹き出した。

あまりの慌てようが、なんだかすごく愛しかった。

「そういえば、シャツどうすればいいですか？」

「あげる」

「ほんとですね？あたし着ちやいますよ」

「いいよ。その代わり僕はこれもらうから」

そう言つて眼前に差し出されたのは…あの日あたしが海に投げたはずのガラスビンだった。

「なっ…！どうしてそれを」

「拾っちゃった」

「ええ！」

「知らなかった。未羽ちゃんこんなに僕のこと好きだったんだね」

そう言う九条さんは…極上のキラースマイルだった。

ああ、あたしはきつと　この笑顔には、一生勝てないに違いない。  
い。

きゅう。幸せをつかむために【最終話】（後書き）

読んでくださりありがとうございました¥（＾Ｏ＾）／物語はひとまずこれにて終幕です。遅筆ですいません。来週水曜、すぐにこれの番外を載せるので、よろしければそちらもよろしくお願い致します  
す 最終話が終わった直後からの話になります（＾　＾）

すぴんあうと。未羽と九条と黒瀬ひな。

いつから気づいてた、って最初から。

ちなみに連絡先交換したのも、初めてあの人に会ったその日のうち、  
だっただけだね。

《Side・黒瀬ひな》

「ちよつとひなっ」

「なあに〜」

「なあに、じゃないっ。またあんたって奴は九条さんにあることないこと吹きこんでっ…!」

「うふふー。全部あることでしょう?」

「なおいわ!」

季節は初秋。十月。昼休み。あたしは、今日も自分の情報網を駆使して未羽で遊んでいた。

「あつれえ、そんなこと言っでいいのかなあ、未羽。キューピッドさまにしつれーだよお?」

「うぐっ…」

「うふ さあてまた色々聞き出したいこともあるしい…屋上行こう  
かっ？」

につこり笑って言うと、未羽は苦アい顔をしながらも大人しく後ろ  
をついてきた。うーん、素直でいいねっ。

「でえ？何か進展はあったわけ」

クラスメートに情報が漏れないように場所を屋上に変えたのち、あ  
たしは早速未羽に詰め寄った。

「し、進展て」

あたしの見解ではあ、未羽は奥手だけだと思い詰めれば突っ走るし、  
九条さんなんて確かに紳士だけでああ見えて結構押し強いと思うの  
ね？だから割と早くいいとこまで進んでんじゃないかと思うわけだ  
けどお。そこんとこどーなのっ？

そう一息に言うと、未羽は啞然としていた。

「な、なんでそのこと」

「んー？九条さんが実は押し強いって話い？」

「…とかそこらへん」

「まだまだだねえ。あーゆう表面ニコニコしてるのが、一番腹黒か  
ったりするんだよお」

言ってやると、単純な未羽は黙り込む。



「でえ？九条さんって激しいのっ」

「はっ？」

顔真っ赤にして。ほんと、未羽っていじり甲斐ある。

「うふっ、これはただの好奇心で聞いてるだけだから。九条さんって、激しいの？どーなの？」

「待て待て待て待て待て何の話よっ」

「何って…もちろん、セ」

「待て言っな！羞恥心ないわけ！？」

「あるにはあるけどお…今は発揮されてないかな。で、答えは？」

「くっつ、したことないから分かりません！」

「してないのお？」

「そのつまらんみたいな反応やめて」

「じゃキスんときは？」

矢継ぎ早に質問する。こーゆうのは考える隙を与えちゃだめなのよね！。

「かつ…関係ないでしょお！」

「大有りだもんっ！さ、どーなの」

にじり寄ると未羽は顔を真っ赤にして黙り込んだ。もしかしてキスされてるときのこと思い出してるな。

「し……」

「し？」

「死にそうに、なる」

蚊の鳴くような声で耳に届いたのは、そんな言葉だった。

「っ……っ、つまり息もできないくらい激しいんだっ」

「違うわ！や、確かに息できなくて苦しいときもあるけどっ！そうになったら休ませてくれるし！そうじゃなくて精神的な問題なの」

…あたし的には「休ませてくれる」っていうのが気になって仕方ないところだけど、突っ込まないでいてあげよう。

「ドキドキすぎて……ってやつ？」

「そうそう」

「……のろけだねえ」

「あんたが喋らせたんじゃないっ」

「うるさいっ。このっ、健気に毎日もらったワイシャツ着やがってゝ！成敗してくれるっ」

隣に座っていた未羽のワイシャツの襟を掴むと、未羽は「やめてゝ」と笑う。ひとしきりじゃれ合い、笑って。ふと、未羽が真面目な顔になった。

「未羽？」

「ひな…あたし、本当に良かったんだよね？」

「え？」

本当に良かった？なんのこと？

「あの時ひなはああやって背中押してくれたけど…本当に、九条さんを好きになわけじゃなかったの」

一瞬なんことが考えて　　すぐに理解した。

「…ばっかだねえゝ。まだそれ気にしてたのお？だからあ、そんなんじゃないって」

「でも、あたしと九条さんが会ったって知った時ひなすごい渋面作ってたし」

…ああ、未羽たちが初めて一緒に海でかけたときのことかな、これは。

「あれはね、未羽の様子おかしかったから、九条さんが我慢できなくなつて転勤のこと言つちやつたんじゃないかと思つてさ。そのなればあたしの『未羽に告らせよう作戦』もパアになるわけでしょお？だからだよ」

まあつたく、このムスメは本当疑り深いってゆーか、なんてゆーか。つまるところ、優しいんだよねえ。

あたしはにやつと笑つて未羽の額を小突いた。

「心配ご無用。あたしは、未羽が幸せになつてくれて本当に嬉しいんだから。一生ラブラブしててよ」

「ひな…」

「それにねえ、あたしにはもつといい男がこれから先現れる予定なの！九条さんなんかメじゃないよ」

言つと、未羽が、やつと晴れ晴れと笑つてくれた。やっぱり未羽はこの笑顔でなきゃ。

「うん。だよね。あたしもそう思う」

「でつしょお？さ、戻つてご飯食べよー」

あたしはボン、と未羽の背中を叩く。

季節は初秋。十月。昼休み。今日もあたしは大好きな友達が傍にいて、元気で、幸せ者だ。

君はそんなことない、って言っけれど。

僕はいつだって君に関することには、余裕なんてないんだよ。

《Side・九条透真》

「そっいえば九条さん。前まで九条さんがいた仕事場って、幽霊出ます?」

それは、二度目の海からの帰り道、僕の車の中でのことだった。

ついさっき彼女から告白をされて、僕も気持ちを伝えて。

それでどうして車の中でそんな方向の話題になるのか、全く分からなかった。

「ええと…どうして?」

「あの、だって。…さっき初めて会ったときの話、したじゃないですか?」

「海で『水かけたのはわざとだ』ってバラしたときのこと?」

「…、はい。それで思い出したんですけど、あの後更衣室でシャツ着替えてるとき、扉がドンッて鳴ったんですよ。だからポルターガイスト!?!とか思ってた…」

すると未羽ちゃんは答えない僕を見て、「そ、そんなわけですよね。あはは、忘れて下さい」と慌てて訂正をした。

…いや違う。答えなかったんじゃない。

答えられなかったんだ。

だって

「あ、あの、九条さん？」

「…未羽ちゃん」

「は、はいっ」

「…僕はあそこに五年いたけどね、そんな話一度も聞いたことも見たこともないよ？」

笑って言うと、未羽ちゃんは赤くなって固まった。

僕のこの笑顔に未羽ちゃんが弱いつてこと、薄々気付きながらやってるんだから僕も結構人が悪いと思う。

「そんなことより、さっき呼び捨てで僕の名前呼んだでしょ？もう一回呼んでよ」

「ええっ、無理です！」

「どうして？」

さつきは平然と呼んだじゃない、と言うと未羽ちゃんはたじろいだ。

「その、さつきは勢いで……」

「今も呼べるって。ほら」

ん？と優しく促すけれど、依然彼女は赤くなって縮こまるばかりだ。耳とかやばいくらい赤い。

ああどーしよ、可愛い。

クスクス笑うと、未羽ちゃんが「なんで笑ってるんですか！」と運転する僕の左腕を叩いた。

本当はたいして痛くないくせに痛いよ、と言いながら僕は形容しがたい幸福感に頬をゆるませる。

本当、あの時水をかけに動いた僕の右腕に感謝だ。

それから僕は、頬を膨らます彼女の横顔を盗み見た。

ねえ未羽ちゃん？今僕は君からの話を逸らしたけれど

あの時扉が鳴ったのは、本当に心霊現象でもなんでもないんだ。

…だって。ただ君と初めてまともに会話して、おまけに自分のワイシャツまで貸してあげることになって。

そのやり場のない気持ちをつい扉にぶつけちゃっただけなんだから。

「未―羽ちゃん」

「…なんですか、もう」

ほらね。余裕なんて、ないだろ？

片思いだったはずが、両思いで、しかも恋人同士になれて。

それでもまだまだ近づきたいって思うのは、わがままでしょうか？

《Side・櫻未羽》

「あ、意外と広いんですね」

「その分家賃はかかるんだけどねー」

残暑もそろそろ消えそうな九月下旬。あたしは、もう少しで付き合  
って一ヶ月になる九条さん宅に遊びに来ていた。

だいぶ渋られたけど、どうしても頼むと了承してくれたのだ。

「部屋、綺麗じゃないですか。どうしてあんなに渋ってたんですか  
？」



ソファー、ベッド、テレビ、ローテーブル、フローリングの床。全体的にすっきりとしていて、でもどこか温かみを感じる、そんな家だった。

片付いてるし、割と新しいし、来られるのを嫌がった理由が分からない。

「…うん。べつに、そういうんじゃない…理由は、他にあるから」  
珍しく歯切れ悪い九条さんが、ばつが悪そうに呟く。

あんまり言いたくなさそうだな、と思ったから、あたしもそれ以上の追及はやめた。

「でも、来れて良かった」

心からそう言うと、自然に笑みがこぼれる。今日あたしが九条さんの家で遊びたかったのは、その…ある目的があるからだった。

それはズバリ、いちゃいちゃすること。ぶっちゃけ、付き合い始めたはいーけど…九条さんが足りない。欠乏症だと思う。

デートは3回行った。そのうち2回はだいぶいい雰囲気だったはずなのに　九条さんは、まだ手をつなぐ以上のことをしてくれないのだ。

あたしってそんな女としてだめ？とか、やっぱりまだ子どもだから？とか、正直思うところはいっぱいある。でも、うじうじしてるだけじゃ駄目だから、こうして人目を気にしないでいい家に来たわけだけ。

…さつきからことあることにあたしと距離を取る九条さんは、何なのだろう。今は二人でソファアに座っているけど、やっぱり間には微妙な距離が空いていた。

「九条さん」

さりげなく近寄ると、席を立たれた。

「お茶のおかわりとしてくるよ」

…なんで？どうして？そんなにあたしといるのが嫌？

もつともつと近づきたいって思うのは      あたしだけなの？

俯いて膝の上で拳を握ると、手の甲に雫が落ちた。…涙だ。

だめ、ここで泣いちゃ狡いと思う。だけど、止まらない。

「~~~~うーっ…」

堪えきれなかった嗚咽が漏れる。耳聴く聞き取った九条さんが、慌ててキッチンからリビングに戻って来た。

「未羽ちゃん！？なんで泣いてんのっ？」

ソファアに座るあたしの正面にしゃがんで、頬に手を伸ばす。だけどそれが触れる前に、あたしは手を振り払った。

「さっ、わからないで下さい！」

彼が目を見開く。

「嫌なんでしょう？あたしに触れるのが、触れられるのが、嫌なんでしょう？だから…避けるんですよ？キスもしてくんないんですよ！？子どもだから！？だから駄目なの！？」

ああ駄目だ。もう止まらない。

「あたしは九条さんにもっと近づきたかった。だから家に来たかった。でもこれじゃあ、全然意味がない。…騒いすみませんでした。帰ります」

九条さんの反応を見もしないで、あたしは足元に置いていた鞆をふんどくると、玄関に向かって駆け出した　　はずだった。

「っ、きゃあ！？」

右手に痛みを感じて、視界が反転。気がつけば、ソファアの上に転がされていた。

「えっあれ…」

「　　分かんない？」

あたしの足の方に腰掛けて、上半身だけ半分多いかぶさるような格好の九条さんが、苦しそうな顔で言う。右手は背もたれにつき、左手はあたしの右手を握ったままで。

「二人きりになる僕の家なんかに来て、一度手を出したら止まらない

くなるかもしれないってことが、分かんない？」

「　　っ」

「僕はそんなに余裕なければ、君だって子どもには見えない。けど未成年なのは事実だ。僕はどこまで許されてる？君にどこまで近づいていいの？」

「…九条さん」

「手をつなぐだけで真っ赤になる君にこれ以上なにかしたら、壊れそうで、触れられない」

「…胸がしめつけられた。…そんなこと、考えてくれてたんだ…」

愛しさでいっぱいになる。

知らず知らずのうちに、九条さんの首に両腕を回していた。彼を引き寄せて、耳元で囁く。

「何しても、いいんですよ。九条さんにはもう、そうする権利があります」

笑って言うと、九条さんが一瞬固まるのが分かった。  
そして、その後　　。

こうして、あたしはこの家に来た当初の目的を果たすことができた。  
後日、学校でひなにあんた見てたの？ってくらいことの経緯を言い当てられるのだけど　　それはまた、別の話。

「く、く、く、九条さんっ？い今、舌っ…」

「んー？いやだつて、未羽ちゃんが誘うから」

「誘っ！？してません！」

「未羽ちゃんの泣き顔は、完全に誘ってると思う」

「なんですかそれえ」

「だから、絶対他の男の前で泣いちゃ駄目だ。分かった？」

「っ、はい…」

F i n .

すぴんあうと。 未羽と九条と黒瀬ひな。 （後書き）

お待たせしましてすいませんでしたm（――）m番外も載せ、これにてこのお話は完全に終了となります。一応分かるようにには書いたつもりですが、時系列的には本編 九条さんサイド 未羽サイド ひなサイドになりますね。九条さん視点書きやすかった（´・`・´）ひなは半端なく苦勞しました∴orz何考えてるか分かんない奴なんで。ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！次回作もよろしく願いいたします（\*^ ^\*）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5773f/>

---

彼とあたしとワイシャツと。

2010年11月14日08時54分発行